

寛放録

昭和五年第一月起業

特別
14
1919
418



寛放録

昭和五年八月起筆



寛州自放の印鑑、取り今年の雜記を
寛放録と爲す

○上野の修政廳、本年の干支に因り馬の関する陳列
あり、行て一覽す、若林自着の馬の標本を如の馬具
久敷馬の由お改具、馬の関する治世繪類にあり
まかぬ敷の陳列あり、干支の如を以て干馬を冠
の如き差谷不波お着、西洋流の馬の改具十
数點、七出陳べんとおれ、自今、院後より、吾家
馬と爲の、骨量並其他、玩具ハ、どんあ、とありやと



池上秀敏氏藏

大雅筆能狂言圖

物逢歩一... 出来出可、自今が生九年八月二日...
馬の特別趣味をあらわす... 玉玩具の
馬の尾... 南唐人物... 蹄銀...
右の如く... 記... 呼... 呼... 呼...

南唐人物... 蹄銀... 二個

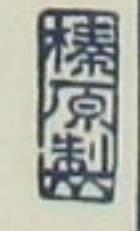
馬漆刑板本 或人の数... 一枚

新開心馬鈕... 一枚

馬鈕... 三枚

大雅... 馬石印

群馬... 李良墨



鈴木... 雲心木彫馬

冷馬形香合

塗金... 乘馬佛

宋宮... 婦人騎馬の墨

木末... 心漆什馬の漆杯

養馬書

西京... 上花六心漆什馬... 麻の冷... 養馬... 六

三春... の油

金... 養馬印

馬鐸... 霜... 二

驛... 鈴... 二

古賀馬

南部... 映馬

九州馬... 株

午... 李良

名古屋... 母寺... 馬

四... 種... 埴輪馬... 玩球... 製

金... 御製... 馬

花... 卷の... 馬

飛... 一... 馬

春... 駒... 六品

外... 製馬鐸

馬の... 紀念... 奉

烟及志心銅書鎮 社馬黃楊印十二支刻

琴平馬の額 玩具神馬

春駒に乗る小兒 琴平木彫馬

玩具馬の首 古栴園塗金墨仙中時

新乗杖馬 馬人相二人あり

三春人形 玩具馬者北内、馬二三枚あり 華陽皮相三冊

おしやあり 玩具馬者北内、曲馬錦繪

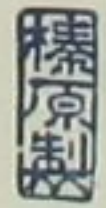
こころの寶印上 千歳繪入りき

波の千馬図 同者 馬相図盤 二枚

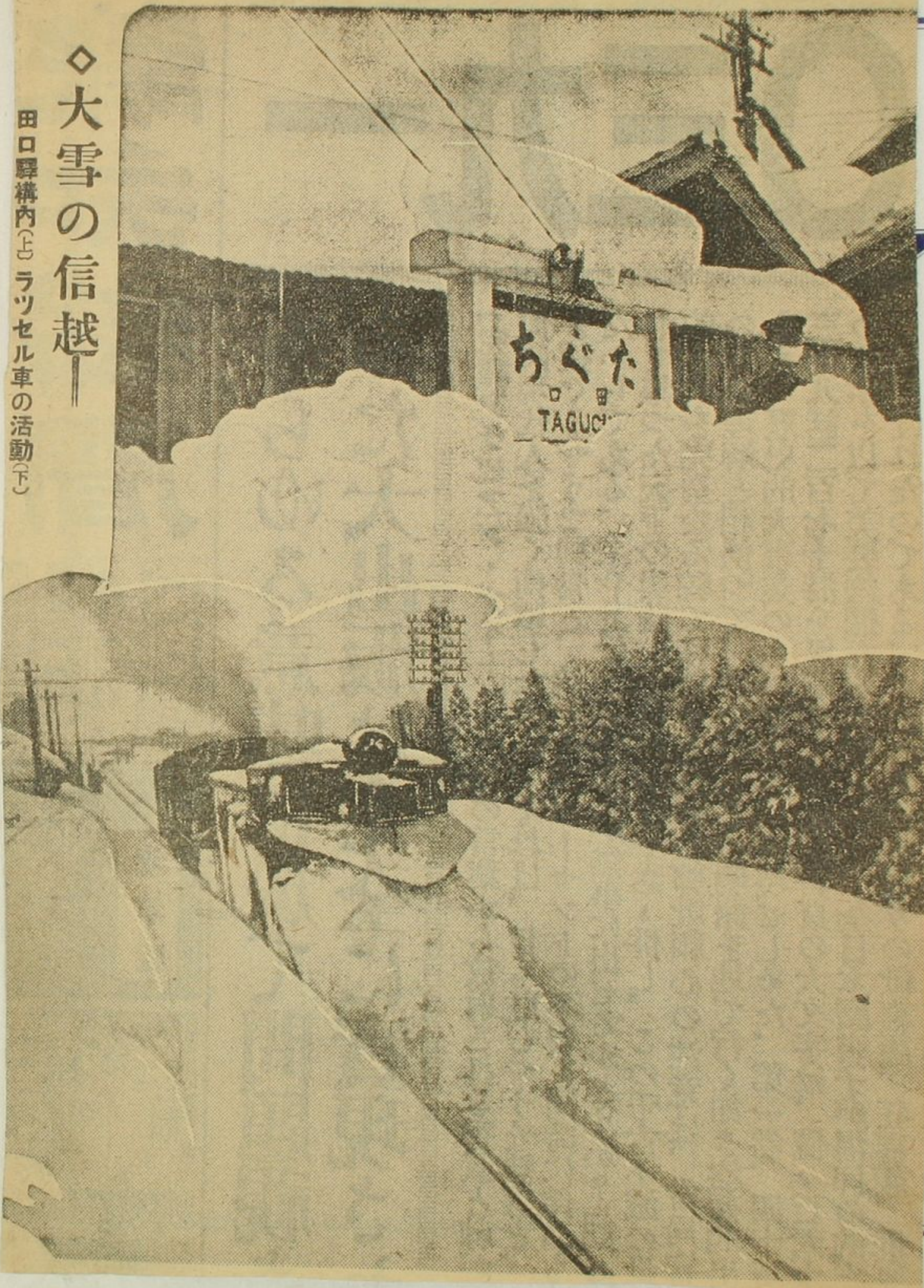
瀧洲出土魏碑 附二枚 馬市報條

馬尾拂子 聲米古流尾語 馬毛筆

こころの書きのけいと多角のふし自今の花汁の内は



すう五十紙と拾くものものがあつた。強て縁をぬき
つげものもあつた。けんごりどりの陣列の七芒しい因りのこの
ふあてあつた。けんごりどりの陣列の七芒しい因りのこの
自今の新巻：曲亭馬琴の印の換刺がある。三川馬
馬といふ者がある。亦新巻の最初の北溪新巻の次の
の初年乗馬が心民に許さぬ時、記する落馬が
頻出したとある。その心民を馬に因らば目録に如
くの事だつた。おかし味がある。ひもさう。
○此今都下で烈書をとる。折柄その心民
如何にもあつた。今報の紙に位紙の
の事だつた。とある。

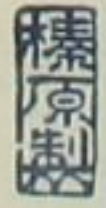


◇大雪の信越

田口驛構内にてラツセル車の活動(下)

の四脚三脚其の腰底にありて山人の廿七回志を尋み
 其の遺書を抄録し此の終りに自伝と江見山麓の
 の三人が山人に遺書を追憶話をやられた。その筆
 記が印刷されて海列目録と共に冊子とすると
 千元と達した。江見の海濱に聴ゆべし山麓の
 聴ゆべしと云うは、今迄に聞かぬと云ふは、何
 人か何れあるかのいろいろの句を考証し取ると山人の
 其の位を説きとみる。そこには義み或の二行もある。その
 くは興味がある。おまゝに書道楽にうきめをやりし
 にもかゝる多くの句は公物かえむとみる。女の酒場は
 酒豪の女あるかの如く、斗酒身もや日暮るんを胡
 八刻と音しとの猜を得たり天一升と提げて来い

年礼の乱る終る
 し袴かゝるとあるの、目介と休むが年賀を以て美を
 困として新年の悪友と云ふは、此の時の句かとい
 波のいふてみる、一吸、位する。い波、し初めとさ
 く山人のアダ名に酒の内の直ぐ寝」とあるの、今も
 各冷目稱は、秋山陽先生をもちつて未三行先生と
 いふアダ名もあるといふ。山人自分の家もあると未
 名、邪魔でゐるが、あけぬとある。友人の古
 高を借りてゐる紙持夫を出たけり。久持、あけ
 たいの、三行書くと著を校するをいひ、此のアダ名
 があつたといふ、おせうい。此の冊子の末に山人の著心
 年表の附してある、まゐら左の如くである。



(附) 尾崎紅葉山人略傳並ニ著作年表

半可通人、縁山、十千萬堂、名は徳太郎慶應三年十二月十六日、芝神明に生れ東京帝大法科に入り
 文科に轉じ在校二年にして退く。

是より先同志と硯友社を九段中坂上に組織し雑誌我樂多文庫を發刊す。後に讀賣新聞社に入り三十
 六年十月三十日胃の痼疾により病み歿す年三十七、辭世の句に『死なば秋露のひぬ間ぞ面白き』彩文
 院紅葉日崇居士と云ふ。

江島土産屏風	我樂多文庫	一八年五月	南無阿彌陀佛	百花園	二三年四月
娘博士	同	一九年五月	同後	紅葉叢書	
YES & NO			風雅娘	新著百種	二二年五月
風流京人形	同	二二年一月	江戸水	文庫	二二年七月
紅子戯話	同	二二年五月	うかれ鳥	百千鳥	二二年九月
二人比丘尼色懺悔	新著百種	二二年一月	文の手引草	文庫	二二年九月
やまご昭君	文庫	二二年七月	戀山賤	同	二二年九月

尾崎紅葉山人の著書年表
 尾崎紅葉山人の著書年表
 尾崎紅葉山人の著書年表

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

關東五郎	少年文學	二三年十一月	此ぬし	新作十二番	二三年九月
裸美人	讀賣新聞	二三年十二月	文ながし	江戸紫	二三年十月
初時雨	小説群芳	二三年十二月	鬼桃太郎	幼年文學	
紅懷紙	讀賣新聞	二三年十二月	新桃花扇	江戸紫	二三年三月
枯華微笑	國民の友	二三年一月	巴波川	新著百種	二三年三月
飾海老	讀賣新聞	二三年一月	七十二文命の安賣	文學世界	二四年三月
京鹿子	小説群芳	二三年二月	二人棕助	少年文學	二四年三月
猿枕	讀賣新聞	二三年二月	二人女房	都の花、太陽	二四年五月
新色懺悔	讀賣新聞	二三年二月	おぼろ舟	讀賣新聞	二三年三月
浮藏王	閨秀雜誌、文庫	二三年三月	むき玉子	二人女	二四年一月
夏瘦	讀賣新聞	二三年五月	夏小袖	同「匿名にて」	二四年
わかれ蚊帳	江戸紫	二三年六月	伽羅物語	讀賣新聞	二五年
戀の蛻	都の花	二三年七月	女の顔	讀賣新聞	二五年一月
伽羅枕	讀賣新聞	二三年七月	花くもり	同	二四年十月
			紅白毒饅頭	同	

燒繼茶椀	同「袖時雨と改題」	二四年五月	青葡萄	讀賣新聞	二八年九月
三人妻(禁止)	讀賣新聞	二五年三月	多情多恨	同	二九年二月
戀の病	同	二五年二月	浮木丸	同	二九年九月
三筋の髪	同	二六年一月	斷片	青年	二九年
男こゝろ	同	二六年三月	金色夜叉前篇	讀賣新聞	三〇年一月
心の闇	同	二六年六月	黄檯句	同	三〇年一月
隣の女	同	二六年八月	安和歌貌林	新小説	三〇年一月
紫	同	二七年一月	千箱の玉章	世界の日本	三〇年一月
片鱗(風葉合作)	同	二七年二月	西洋娘氣質	讀賣新聞	三〇年四月
草紅葉	小説百家選	二七年七月	金色夜叉後篇	同	三〇年九月
不言不語	讀賣新聞	二八年	銀	新小説	三〇年九月
笛吹川(ながし合作)同		二八年五月	手引きの糸	同	三一年一月
鷹料理	四の緒	二八年七月	和蘭陀片	太陽	三一年一月
三箇條	同		續金色夜叉	讀賣新聞	三一年一月

カタログは、カネサキに附ける目録として、出雲崎と同日、町に...

昭和六年の年礼の乱る終り
... (vertical handwritten text)

油柄杓	新小説	三一年五月	をんな	新小説	三五年九月
八重樺	讀賣新聞	三一年六月	新續金色夜叉	同	三六年一月
心中船	新小説	三一年八月	令夫人	花ころも	三六年一月
新油柄杓	同	三一年十月	黒袖	水面鏡	三六年一月
金色夜叉續々篇	讀賣新聞	三二年一月	金盃	「芝香」	三六年六月
雲のゆくへ		三二年	非常報知器	新小説	三六年八月
東西短慮の刃	讀賣新聞	三三年一月	月と人	同	三六年十月
月下の決闘	同	三三年二月	寫眞帖	同	
茶梳割	新小説	三三年五月	犬枕	讀賣新聞(短篇の初まりと云ふ)	
月下園	夏模様	三三年六月	草分衣	二六新報	
仇浪(田中涼葉作)文祿堂		三四年六月	取舵(實は鏡花氏作)		
僞金	新小説	三五年一月			
をさな心	同	三五年三月			
新續金色夜叉	讀賣新聞	三五年四月			

(高木文氏著「續明治全小説戯曲大觀」より)

紅葉の「おいと」さん 最後に島と別る

新潟縣の巻(五十五)

記者は佐渡における最後の旅程をたどるべく、新町から小木港に向つた、島には鐵道がない代りに乗合自動車は實によく發達してゐる、それだけに道路もよい、そしてその沿道はまた實に景色がよい佐渡は風景美の國だなどつくづく思ふ。

新町を出て暫く行くと、基隆波の勝といふのがあり、波が基隆の目の様に四角に規則正しく打つてゐるのだ、これはおそらく潮流が衝突して出来る現象だらう。

自動車はあるひは波打ち際を通るかと思へば、たちまちにして絶壁の上に出で、たちまちにして松林の間を縫ふ、奇形の前をふさぐかと思へば、たちまちに展げる目もはるかなる風景。



佐渡は狭いやうで、案外島は島だと思ふ。

小木は湖でもつ...とおきさで唄ふ、むかし相川鐵山の榮えた時代、小木もそれにつれて繁昌した、餘山への物資、本土との交通はみんなこの小木港から吞吐された。港には船隻の上、下番町が置かれて、物資や人間の出入國を取締つた。

當時の番所が出した出入國の切手といふのは次の様なものである。

他國出歸切手	商人 七兵衛
佐渡往太郡新町村	卯二十三日
身土産	卯より五ヶ年切
朱迄	小木番所
天保二卯年四月廿日	回

小木は島の南端、天然の良港で、遊離港としてはもつて來いのとこ

米圖

甲目 魚目 魚目 魚目

米圖

...

金色夜叉續々篇	讀賣新聞	三二年一月	金盃	三六年六月
雲のゆくへ	讀賣新聞	三二年	非常報知器	三六年八月
東西短慮の刃	讀賣新聞	三三年一月	月ご人	三六年十月
月下の決闘	同	三三年二月	寫真帖	同
茶碗割	新小説	三三年五月	犬枕	讀賣新聞(短篇の初まりと云ふ)
月下園	夏模様	三三年六月	草分衣	二六新報
仇浪(田中涼葉作)文祿堂	三四年六月		取舵(實は鏡花氏作)	(高木文氏著「讀明治全小説戯曲大觀」より)
偽金	新小説	三五年一月		
をさな心	同	三五年三月		
新續金色夜叉	讀賣新聞	三五年四月		

紅葉の「おいと」さんを
最後に島と別る

記者は佐渡における最後の旅程をたどるべく、新町から小木港に向つた、島には鐵道がない代りに乗合自動車は實によく發達してゐる、それだけに道路もよい、そしてその沿道はまた實に景色がよい、佐渡は風景の國だなどつくづく思ふ。

新町を出て暫く行くと、其波の勝といふのが、波が碇の目の様に四角に規則正しく打つてゐるのだ、これはおそらく潮流が衝突して出来る現象だらう。

自動車はあるひは波打ち際を通るかと思へば、たちまちにして絶壁の上に出で、たちまちにして松林の間を縫ふ、奇岩の前をふさぐかと思へば、たちまちに展ける目もはるかなる風景。



指上申一札之事
御江戸よりの流人
台百人、此内貳人は女
右の流人無相違調取申所紛無
御座候爲念御座候御座候以上
延寶二年庚申七月十九日
野田又左衛門
眞砂庵御座候

ろ、從つて島へ来る舟の外に、前にもしばしば習いたが、瀬戸内海から、日本海を越つて越後へ来る舟も、一度は必ず小木へ立寄つて日和を待つた、越後の海岸が、北を受けて波が荒く、容易に舟がつけられ、當時の名残りである。

も送られたことがわかる。紅葉の「おいと」さんは明治七年、その頃はまだ小木情願は多分に残つてゐたと見える、あの煙草店が相川のところで切れてゐるが、紅葉は小木へやつて来て、こゝで一ヶ月ばかり滞在したか、それが小木での情願秘史、ごんざやのおいととの物語りは、つひに小説にも何にも残されてゐないが、そのおいとさん、いまは町の米屋の細君になつて、おとよといふ。

物好きの記者は小木へ一泊したその夜、おいとさんを訪ねて見た、往年、紅葉を模した色香の残つてゐるはずもないが、すて、こを著て、手紙をかぶつて出て来たのを見ると、いゝお婆アさんだ。

「もう古いことではなりましたが、若いときの道業——といつたつて、先生はほんとにまじつて、夏でしたが、先生浴衣が一枚しかないで、わたしが縫つて差上げたりました、エ、よく一練に染を散歩したものです……」

とんだところで、おいとさんから昔のおろけみいたいことをきかされて發つたが、「何か先生の書いたものを持つてゐるさうですな」「いゝえ何もありませんた、歸るとき兩津から書いて寄越された一丈ばかりの手紙——」「エッ一丈——」

もうたくさんだと思つたが、記者も辛抱して、「そんなこと書いてあつたんです」「そんなこといへませんよ……」とらう、おいとさんは記者の野暮な質問を黙してしまつた。

ソツツではあるが面長なそしてバツチリした眼付に、どこかなく、むかしの面影をかすかに見出した(完)

昔様へ——これで僕の經濟風土記を終ります、長い新潟縣の巻でした、讀者も定めしうんざりされたことと思ひます、しかしいはいは腹ふくらむわざとか、見たりきいたりしたとを、出来る限り書いたのです、これもまた多くの科を遺してゐます、種々材料をくださつた方、お世話になつた方、御忠言を頂いた方、諸方の皆様に厚く御禮申上げます。(茅野生)

○今和ニウーといふ早大史料の取扱の千りきりな「新
改大東京史」といふかりきりな出版された「後人
が見れば、東京の由記」といふ新式のものにひきま
を得た。文を多くし、東京の由記をいふ「要」や「要
要」もいやうなものである、東京のことゝ名所旧蹟も
多くあるから、〇唐の割合に依り書きこまてること
が無い。著したといふ未歴を知らうとするが江戸の
此の江戸名所図合の類が長く神法かえりある由
記といふ流りきりしてから一割合のありが「平戸版
部誠一の早大東京史」も「寺門新撰の江戸
史」もいふ倣つたの〇や、戌島柳北の柳橋史の
如きものがあるけれども、其の漢文があるつて、今と

東京史

つての江戸史の如く、大震災が起つた江戸東京を全
部を裁断り去つたので、家伝の七平街の七平街史を
全部改まつて、何から何まで改まつて見ると、たと
いへば、何があつたか、その分り分るゝの如く、追憶集内と
いふ名つけべきものが一時出た、久田輝吉の「反燼を
踏んび」といふ冊子もいふ其一つである。今日の「震
災前と後」といふものが、改つて、この「東京の由記」の必要
が生じて来た。物貨の「変化」が起つたのひききり、世相
も、非常の「変化」が生じた。東京に住むしるゝもの
も、今つて世相の「変化」が少くも、今も東京の「新
らしい世界」に、従来の東京の由記の「時」を「今」とする
てつた。最子や江戸名所図合や「東京史」の「昔」

（東京史）

文と云本小室右海の三氏が民選(漸院)并といふ
を考行し其文七載せしある。恐らく此の連白
が此程の連白の最初のものあり。その四書あるは
副論後編板垣江為由利小室(佐三) 馬本(健三)
長澤(法)の各が(列)してある。今本澤オの筆も大成
つれよあり。一應連白の考証が是と見え。その
ん。對し加藤弘之ハ寧ろ獨逸(露)を其意あり。國
体の美を説き(漸院)を無意の府に之を以て對
副論後編板垣の三人の各が(佐三)がある。其のハ志
キリ(佐三)の代議政体論を引用してのこが片や獨
この考が(佐三)對し片や英吉利の考の論論
之あり(佐三)も、當時の切緯(佐三)を以て見る。尚ほ此

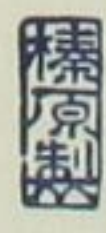


が(佐三)本小室古澤三人の各が(民選)漸院(報)といふ
長(佐三)論が(佐三)あり。その(佐三)時(の)政治(を)論(ず)る(は)漸(院)長
二(佐三)出(少)数の(有)司(が)政(権)を(握)る(事)の(契)機(を)考(へ)て(統
計(を)修)る(勅)奏(任)官(が)め(る)事(を)考(へ)る(は)漸(院)から(出)て
お(る)か(の)實(際)も(も)考(へ)て(み)る。漸(院)其(他)二(三)篇
が(漸)院(の)大(業)を(統)する(大)事(を)論(ず)る(は)漸(院)が(あ)る(事)を(考)へ(る)よ
是(等)四(氏)の(多)数(を)論(ず)る(は)其(の)切(筋)の(又)論(ず)る
こと(の)論(ず)る(は)こと(を)云(う)る(は)考(へ)る(は)漸(院)長
に(對)する(は)對(抗)運(動)の(現)れ(を)論(ず)る(は)民(選)漸(院)の(連
白)を(考)へ(る)を(考)へ(る)の(連)存(する)中(の)政(策)を(考)へ(る)は
有(司)專(權)の(契)機(を)考(へ)る(は)之(を)考(へ)る(は)漸(院)の(契)機(を)
民(選)漸(院)の(契)機(を)考(へ)る(は)漸(院)の(契)機(を)考(へ)る(は)漸(院)の(契)機(を)

日本の三憲史の初頭：出のべき材料はちと思ふと
父故板ひをさすけりてめり此十冊も其籍助の博識
らきを得意の
一月十日記

○老野里以後の亦原の誇りとすい常て詢信の脱行
杉原氏常陸公親室の長城なりしことある。亦原は
其の城址おろる化念碑を存せり。親室が御持
亦原の城まじりし一考あり、親室係日、云く

是く先皇帝の仇克平林剽滅と孰くと
七種の新舊田長須強くして居せり、五十卷
と極つて反抗す、景林者へ自から兵を率て
我すんを治るの逆れ、是を利ある
しく師を現すこと故田及び殊々大に十



「春城漫筆」出づ

新春の好読みもの

本書は著者自ら其序言に於てある如く「年一冊づきの春城漫筆」を近年の恒例としてある春城市市長の近世に公にしたもので、隨筆家として今や随筆の巨匠に立つてゐる先生の名は、敢て本書の紹介を必要とせぬほど、江蘇の讀書子をしてたゞちにその實に充分の魅力あることを感ぜしむるに足るであらうが、しかも愚考を受けた破竹の情を聊か録して未だこの快著に接せぬ同好の士に本書を薦めて置きたいと思ふ。

四百五十余ページの内容は「走馬亭」下廿七項と「謝書余録」十七項と竹下厨三十九項のほか、故内田魯庵氏が先生の著「春城漫筆」を評した一文を附載したものが其全部であるが巻頭の「長

寛政の逸事一つだけでも文藝の土に種々の方面から溢れてゐる従來の良書談にも未だ曾て聞かざる事蹟で一讀してはゆるぎなき書評の快感を覺える。「一ハ」に過ぎぬ短文ではあるが、「二」に就ての珍聞」とする一語も、世に知られざる事實であるから、本書によつて興味と知識を同時に得られ、益も各書の断片に接するやうに思ふものは、恐らく自分のみであるまい。

「地方の家庭美と失業対策や、文藝と命懸」の二項などは先生獨特の觀察や主張が加はつて頗る面白く、「謝書余録」では「大隈家の反故しらへ」を其白前に推すべきであらう、岩倉、三條の御公始め木戸、西郷、伊藤、井上、の諸元勳から来た山なす野筋を整理して其

中から特に重大な國務に關するものや、興味の津々たるものについて語つてゐるので三條公の書牘が、實相談的で自説の主眼がないに反して、木戸公のは一々意匠を凝らしてある所など地下の偉人を映び、映して歷々興感を見るが如くに寫されてゐる。

「三十六人」に對する文藝的研究なども趣味家として知られるこの書の著者ならではと、かされるばかりに、さながら實物に接するが如き細微でも、快なる述に自分は一氣に讀破するを禁じ得なかつた、この外「塔」についても「本室」についても皆それなりに著者の見識と造詣とが窺はれて後學者の心を啓發せしめる所が多い。

「春城漫筆」三十卷、「家隨筆」八則は、讀後、小説の佳作を一時に鑑賞するに似た興趣に富んだものであり、「長崎」と「北城」は其趣は引續いてこれを漫筆と稱する

には惜しいがする。

かう書いてくると結局全項目を一々紹介せねばならぬことになるから以上略叙した所で全體の味をひを察してほしいが先生の漫筆に自分が最も佩服するのは、引用や考證の死板で乾燥した文字を避け、なるべくそれらを簡明にして、讀後、下に留めず、了せしむるやうに簡潔な趣味的な現方法を以てする所だ、これはよほど世に長けて其筆を揮ひ得るものなれば、さうした、味で隨筆界の第一人者であることに今さら自分の謙を要せぬ、此人にして所著あるは、極めて當然であるとも、本書の眞價もまた、得べきではないか、快讀一冊、分はこれを世に讀書人に薦せしめて、これを世に告ぐ（定価二圓五十錢、東京牛込早稲田大學出版部發行）

一年の秋より上杉軍大敗し、其の難き殉者。然るに満家の遺領に有る城は五、
十の城に過ぎざるを以て、治長宗範らんとて、その城を
とりし。城代藤田長頼は、巧言を以て、誘
ひ味方とすべしと試みたり。長頼は、此の誘
ひ、あるは満家の臣三瓶某、治長に、
詐つて長頼を殺し、治長に降りたり。此の事
も春田山にて、一景、始末あり。其の満家の跡
の徳川とて、概して天正十四年の春、特にお宝
に、お宝家を相傳すべく命じ、満家の遺領全
部を其の事、親宗命を拜して、其の城を四復
すと、浅見強如、今井作左、寺を築ひ、其の



向つて、そのお宝を誅殺し、其の時、治長の遺領に
あり、其の姓を冒す。此後、天正十七年の夏、治
長の後あり、同十八年の春、小田原の役あり、十九年
の夏、九戸の役あり、文禄元年の春、朝鮮の役
あり、その後、関ヶ原の役あり、て、常に武勇と
かたじけなく。天正三年、其の、今井、に、後、其の、お宝
を、其の、郷土の、誇りとして、河内、も、其の、才、に、指、を、
する、此の、武將の、治下、に、立、つ、る、事、も、是、の、
五年、に、秋、の、冬、の、後、其の、十五年、に、其の、五月、十二
日、か、その、忌辰、に、下、つ、る、御堂、親宗、の、為、の、紀念、祭、
を、催、さん、として、展、祝、に、供、す、と、て、文、獻、に、關、し、余、に

詔ふ所あり、偶々大橋圖書彼が昨年の多量の文書
を多く寄託を受けし事とせよ、その趣由をいふに
難敷く、^{大橋}大橋の書物、昔々文獻遺物、一旦、典
物として、米沢侯之に譲られし事、^{大橋}大橋の書物、
丸を受けし事、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
寄託と大橋圖書彼が、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
浮出身の陸軍少将、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
書物、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
き深く、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
交付し、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
靴の考、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
ハ心、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、

大橋

約成り上りたり、聊か其の歎末を愛と稱しとき
大連に杉原流とまの人あり、^{大橋}大橋の書物、
文字あり、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
つとむる、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
歎、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
親憲初の跡と稱す、^{大橋}大橋の書物、
に生く、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
宣意の子、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
の跡とせし、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
福、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
歎、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、
茶毘の烟、^{大橋}大橋の書物、^{大橋}大橋の書物、

其の信之疏、荷ふる物を捨つる口こ入るくあり、火
影に依つて之を之観へ、其口里くく物喰く恰
かに鬼女の残骨を拾ひ啖ふに似たり。盛定意
其心体を見現はんと欲し、更なる歩を其傍
らみ進め、以て彼忽ち人の未るを笑り、急し
身を起しと走り去らんとも。盛定其袂を
捕え、詰つて曰く、鬼歎妖歎何ぞ人骨を
啖ふぞと、彼報謝して曰く、吾は鬼の女
す妖のあり、其に南村のよ、常のちみく茶
昆の灰を、穢特めをばん、此人多く利益す
るものよしと、信つてお初め之を試みるのよし
何んを圖えん、夫人の報もなき、慚愧、信す



と猿を食ふ中、こゝろ出ると之を示す、盛定意深
く其別腹、さうも感、以て斯く斯く人を取ら
ば、さうも別腹の子孫を得んと、月夜を納
れ、帰るとさうも、果して親室の如き、絶倫の武
勇を得ゆると、語次、此部を、(歎)をも後
くへき、さうも、定也
一月上、御
也、執儀、さうも、羅刀、さうも、御子、さ
振、さうも、さうも、盛定の心とあり、
江田太華、鷹山居、信く、志、即を、是、人
である。太華の孫、即、嗣子、政次、の二男、美、親、が
杉原家、の、美、子、と、さうも、其、家、を、継、ぎ、さうも
故、を、以、て、杉原家、と、名、を、傳、へ、さうも

日銀地下室の秘境 滅多に開かぬ大扉

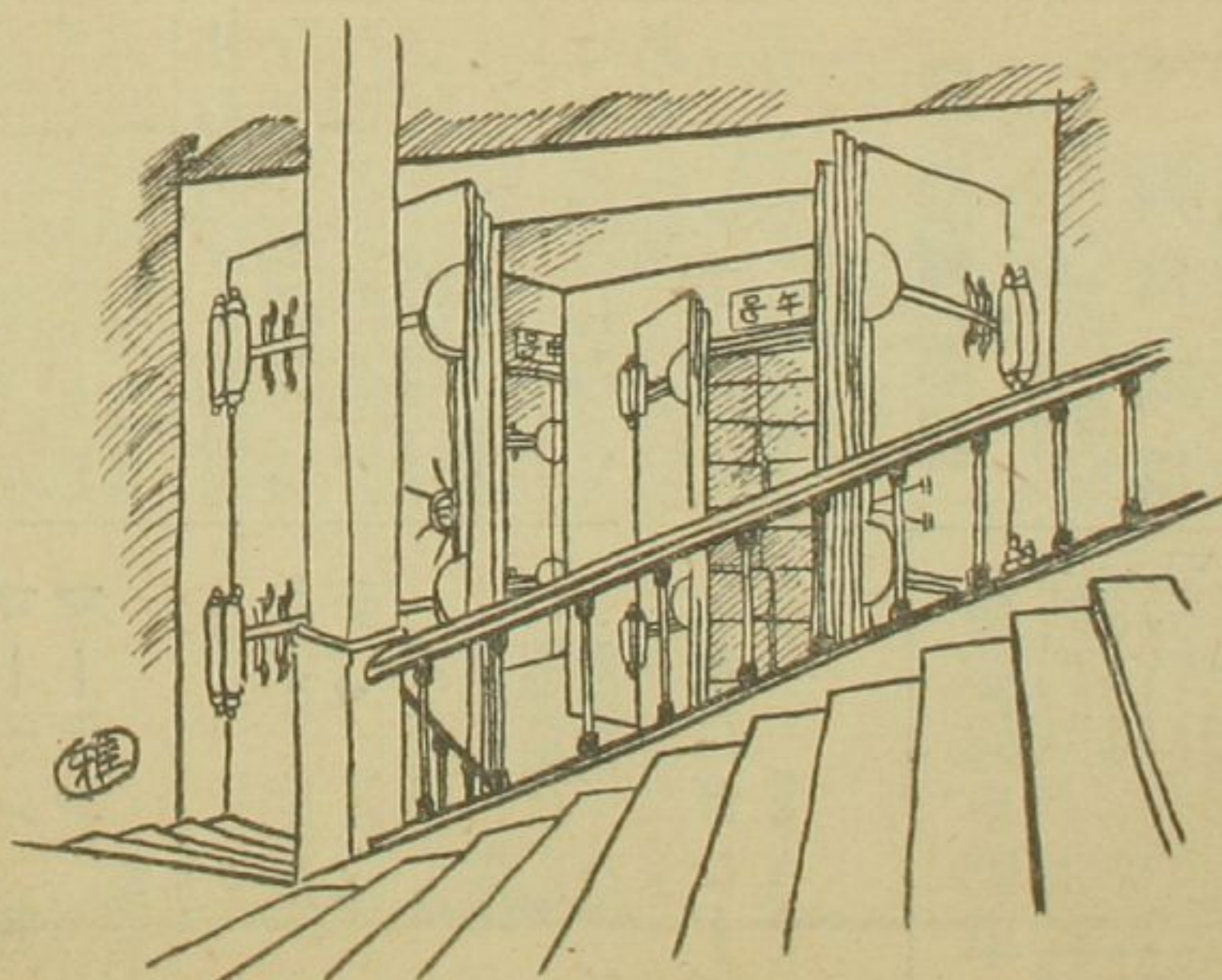
愈々あす—昭和金貨を世に送る

大金庫物語り

緊要の時は—先づそれまではと
明瞭五萬圓づゝが一箱にチーツ
と納まつて所千原萬程か知らない
が、日本銀行にぎつしり仕舞はれ
て居る彼等金貨の身の上にも「目
由」な日が来る、イソツプ流にい
へば「あゝもう一日だ！自由な陽
の光がやがてさし込んで来るぞ」
とつぶやきあつて居る事だらう

◆ その金貨や金塊（幾形金塊）が仕
舞はれてある大金庫—これは日
本銀行出納局の下の邊りに當る地
下室で二ツ折れになつた階段が深
く地階に降り下つてゐる、正面は
大きな扉の扉で、これは出納局長
が局の係員數名を伴つて大きな

◆ 金の庫が、スハ火事といふやうな
時どうするか、世間では水の壁が
出来てゐるとか、金貨が水浸しに
なつてゐるとか、うはさされてゐ
るけれども、そんなことはないさう
だ、たゞ敷所に太い水道管が裝
置されてゐるから、萬一の場合そ
れを抜けば地下一面水溜りにな
る譯で、そんな所から水壁のうは
さが生れたのかも知れない、まあ
何にしても如何なる場合でもこの
大金庫だけは絶対安全だ



したかときびしい御金庫が、まつ
た、その楯玉に上つたのが一人の
小使さん、怪しからんとあつて懸
被直接解雇を言渡したといふ話
は、あまり知られてゐないエピソード
—この金庫が使用人を首に
したとは、なかく大した勢ひの
あるものだと言更のやうに思ひ出
される(圖面は金庫の一部)

こいつ笑へない

金貨送出しの喜劇

短銃携帯の行員に護られて

二百萬圓の都入り

【大阪電話】昭和五年一月十日、
貨しめて二百萬圓世、これを大
阪から東京へ送出す段取になつ
て九日早朝もよらぬ大悶着を引
起した、日銀ではこの現送を非
常に重要視し何分送られるものが
今や國を擧げて人氣のせう點にあ
る岡女金貨であるので、もし汽車
輸送の

途中

送まれる驚きはなく
ともどうした氣紛れな驚愕者が出
ないとも限らぬとあつて豫てから
鐵道當局と内密に交渉し九日午後
五時十五分、阪神東京行四二列車
の前部に貨車を連結し、その車に
二室を借切つて送ることに手はず
を整へてゐたところ八日終行の大

電話

のベルがけたたまし
く、それで結局既定の午後五時
十五分種込は取消すといふこと
になり日銀は「今日はもう輸送
しないことになつた」と新聞記
者にうそをつく

切つた午後八時、電燈の光ほの暗
い日銀支店の閉門通廊にびつた
りとくつついた荷馬車二台には
飛脚も又つらいもの

城東

線東側に密に置かれ
てあつた貨車に積込んだ
かくて隣くうちに四十箱、重さ
にして約一トンを運び去りたれ
人も想像しなかつた大阪立立
午後十一時二十分三十二列車
に連絡して何處はね頭で暗の東
海道を東京に急いだ、同車には
ピストル携帯の日銀支店員二名
の他守衛三名が二百萬圓の金
箱を腰の下に大黒さまらぬ東
京まで導す番、昭和の御用金
飛脚も又つらいもの

○耶蘇教の儀式は儀式のプログラムの真意と云ふ目がある。真意を沈黙が伴ふ。沈黙と無字の者を讀み返してある。世界を通過する言語である。西洋の語は言語の記号。沈黙の事を言ふとあり、真意が言ふと沈黙の大切である。耶蘇教の儀式は儀式の如くである。強ちそれと云ふ。無言の神に親しむる道である。○言語の四境がある。その四境の通する言の限りのある。沈黙する四境は無である。○世界を通過する。種々の儀式の宗教を包有する。國体としての儀式。自覚の一方の言も。後世や新講の行は難い。只此沈黙

標

のありあつたことを包羅する。

○世界語として風さんによる。そのありあつたこと。前七層と行つてある。エスペラントである。イードーといふ。エスペラントに就いてある。又此二種の後には取つた。エスペラントがある。けんを二層と行つた。斯く世界語を創案した人。ポーランドの二小部族の眼。眼目。ガーマン。ホーク。協士である。之を二層とする。此小部族の種々の人種が混在してある。その言の喧嘩の主要な言語である。たつたことである。

考案キレタル、エスベラントに「北英聖」と云語が
ある。この「頤」の字の比喩の事だと言ふ、トリス
イッチの三十分の作業に比喩が、其の例
外で十日着く二週間の練習で卒業せし
と云ふのである。今又各人の之れが語を此の世界
語の心得あるより、今更事と併用して其の
言葉を不意の外回へ進む意の便利を得る
ことがあるを云ふ

○ポーランドは亡國の悲運に遭つて國
が三ツつもんじ、其れが何故かといふと國民が
彼れに利にてもある為めだといふ。個人として
聰明であるから、各々又説があつて互ひに

その説を固守する。隨つて統治が困難で
ある。同國の政を正七の十乃至百の
こととて次つてもその凡そが推測さ
る。ポーランドは外から身破れぬとい
ふの寧ろ内部にも難の禍を及ぼすとい
ふから、此は後論だといふが、此國の如きの
其の如き例である。

○英人の性格に決意が口重である。之れを及して
佛人の頤る并説に甲をある軽快である。英人
に業ある事があるかとの皮肉の言句に佛人の
業の如くがあるかといふ人の相違がある。
佛人の腹の内をさらけ出してゐるやうな英

人の深く花を現はさるやうな見へる。下なる市民の長短は其の弁舌を徴察せんとする。英王の特重佛國の輕便は其の特質である。世界の佛界家佛人を翹楚に推すが、志命は佛界佛界の必しも一七人を解いてある言のアヤれあるのひらき、推并の實行を言ひ格言のあることく、實行をも推并するよりの比定するると推并英國の佛國を駕するよりのあると言ひぬがらるるもの。

○瑞西の今も若くもその衆議政が残つておる、一回の政治は民衆を野外に集めて話るべきを決する。四州を九州にとりてはるよりの決まらぬを決する。



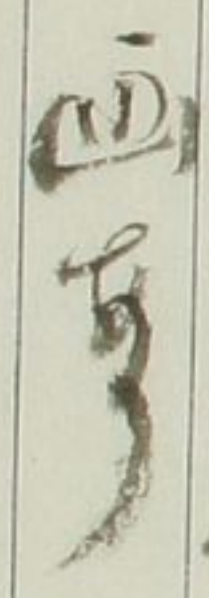
か一二十四の推并五國から成り立つ。如何なる訓練を以てする。一、英一の四國を徹する。二、佛國の議事序の南國の三つを關係の三の小児が群かつておるのみ。三、佛國の政に照らしぬ。四、父兄が正しく子供を教へぬ。送り出すのとやめるとテモウラシム。五、佛國の議事と關係せざるを得ぬ。此の四つを大統領といふがある。六、佛國の委員が一年交代の勤めるのを缺る目立てるの類。七、あるもの他のテモクテミシム。八、見る能くするもの。九、毎年の首の例とするもの。十、佛國の東京

をかきしれ海くまに旅子十のを託さしてあつて
 おひらまきにおは友人の皆あつて唯れも(是)のみ
 そのあはれにおは。例りこそく譽ををまけてしよの
 話しこみ趣に入つて夜未だ終つて投した。終つて
 聊と嬉しくあつて市中に散策。古名印銘を(ま)
 骨董屋通つてをやつたか。此處に自人の目こまき
 やらまよふ。あつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ありあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 が二三見あつた。又法り提出しよる。冊物ごあ
 りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 け紙の防物家の香合、真鍮の公金の根付
 又ひだつた。蛙三個、目母二個、あつた。中



目母の安就在銘のよみか、料加と連
 磨を(ま)しよる。珍しきものあつた。自合
 の目母の佛像を(ま)す。あつた。あつた。あつた。
 の真鍮の金もあつた。時代があつて料加ごあ
 つた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 といふ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 の香合の(ま)の印がある。一月十三日記
 のほめ(ま)送ら(ま)し。あつた。あつた。あつた。

石橋大嶋、下什麼生秋のわくへ
 此の冊物の(ま)送ら(ま)し。石橋、



ちよんといふあまの枝の枝のな

いふよ道邊の枝のな

大根のうらまの打や枝のな

いふよ大根と干し大根

ちよ

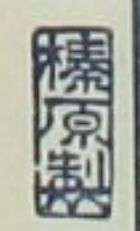
めあぬあぬこのさしはちよ

枝のな

庚午 初めは代り

初巻

えりおりのあき七十一



えり 初鏡首のあきを

えりのおやね本教の

えりおりのあきを

柿一顆未酒りして

あきのうま況を

従家の短に拘り

口何あき

あき

あき

あき

あき

あき

別荘の現に此の七田路の手に入らざりしと云ふ此の
味を味しし

一月十日

◎何の道 此の道は和歌に極
 なるなり。和歌は和歌と云ふは和歌
 朝をすすむ漢の長春を里次よりめし自家
 の抱懐をたしむるなり。其都は他人并歌
 あり積怒を買いし事少かり。又その日
 といふは其の心也。子親心は其の心也。平
 かより。其の報復として其の道は其の形
 を其のなり。其の和歌を極らぬと
 しむる。其の和歌は其の和歌を極らぬと
 中まけりし事。其の和歌は其の和歌を極らぬと
 中まけりし事。其の和歌は其の和歌を極らぬと

和歌

てくこまきなりと云ふ此の和歌は其の和歌を極らぬと

◎世界の 鄙吝を以て其の若者あり。其の和歌は其の和歌を極らぬと
 格調あり。鄙吝は其の和歌は其の和歌を極らぬと
 一種悪徳と云ふ。其の和歌は其の和歌を極らぬと
 子と俟約から起ること。其の和歌は其の和歌を極らぬと
 が之しく。生涯に困難があるから其の和歌は其の和歌を極らぬと
 其の生涯が出来り。其の和歌は其の和歌を極らぬと
 八つの和歌は其の和歌は其の和歌を極らぬと
 鄙吝は其の和歌は其の和歌を極らぬと
 其の和歌は其の和歌は其の和歌を極らぬと
 かよけんがごる。其の和歌は其の和歌を極らぬと

都を改め通り徹してあるが、スコットランド人の就
この型々の挿話の吃驚ける歎する話もある。
勿論、その中以下の社会に就いてのものはある。
日本は七京都や近江の人々、京都の北都が
ある。つまり、侯素子の生活が其の風をとりて
ある。其の流んびである。昔の都のあつた京都
が世の夷風は、今も直二流の都市に落ちる。舊
格を維持すること、が甚だ困難である。若し侯
素子の風の多い他の都市であつたら、今日改
正してある。相違するの侯素子である故に、其
の守りいづかの貯金があるとか、其の向細の
こと、いづれ維持としてある。さう笑ふところか、京



都人のあがま去るとして別を先ければ、後はお茶
漬をとりしよつてとお世辭といふ。實に京都は
ほか七金枝にかけたる、波々のしやう、尾の都を
びとあるが、實に其の風土はスコットランドや瑞西
に似てゐる。北都の土地は皆、風山あり美と
いつて名ある所もある。實に山あり美ある所も、
山は、耕すまき土地が欠乏してゐる地が
あるから、山あり、媚の地は、都々の地であるとも
云ふことがあつた。
○政治趣味、趣味の内は、高きものゝ属する、
日本の世は、建制下や、新時代、たを、頼ら
あつし、知らし、ある、金か、さう、さび、為、政治家、ある。

他の階級を超越しよとあつた。随て權威である
美談の府にあり。我輩ならぬ。封建時代の末
途に生れし幸ひに維新の快潮をうき。変革の思ひ
平民と政治を執味とし得ることとあつたか
ら。若年勃発の政治家とんことを志し。此の
も無理もなき。人の心理にぬることを。俗
の位地から脱する。一躍と手を得る。其
たよる手を得か。一躍と手を得る。其
の好まぬ例。自分も。他もある。若自分が政治
を執申して。此の頃。ある日。おの特殊新義の
青年を家庭に入。て。日。の。学校。通。い。せ。し。こ。と
がある。この自分の物教を。織多と。い。ふ。子。回。胞。に



ある決し。帰てを。主。つ。へ。ま。い。の。あ。つ。た。こ。と。と。や。つ。た。こ。と
である。此の青年の。学。問。の。修。不。ま。く。進。歩。の。め。成。熟
の中。を。終。つ。た。ま。を。あ。ら。ま。り。校。に。進。ま。ん。と。す。る。こ。と
又。自。分。の。其。の。志。を。聴。く。に。所。が。政。治。家。と。ん。こ。と。を
望。む。の。ゆ。え。に。及。動。の。宣。例。に。こ。ま。現。い。ん。と
得。し。此。が。宣。例。の。宣。例。と。つ。つ。し。て。多。く。任。か。ま
と。我。の。世。話。を。す。る。こ。と。を。愛。め。れ。し。と。あ。る。世。に。相
手。と。な。ら。ん。い。ふ。の。か。突。飛。る。宣。例。を。抱。く。の。心。理
上。不。思。儀。い。ふ。の。け。ん。も。去。り。と。も。免。か。成。切。す。べ。き。も。な
い。自。分。の。世。話。を。愛。め。し。所。以。の。あ。る。自。分。の。此。の。若。年
と。同。才。境。界。が。今。も。別。れ。あ。る。ゆ。え。に。あ。る。こ。と。も
遂。に。宣。例。の。若。年。の。志。を。変。え。す。る。こ。と。も。あ。つ。た。自。分。が

志を痛むた為りといふ等の換をいふ。是れ等りこと今
考へて見ると、この如く、蓋して政治家が腐るもの、其の
政治家は、民衆的である。政治家は、試み、思つて
實政をしよう。是れ等を見ることが、今、不快に堪へない。
から、高貴といふことを、低賤にする。あつたらうか、今とつて
の政治家に、感化する。権威化する。今、内閣大臣とい
ふも、決して、重宝にする。きこふもの。大いといふ。このふい
テモ、ソラ、時代とある。人物が、下賤する。材能ある士
ハ、之れ、就と、ことを、好むもの。寧ろ、己の能力を、他
衝か、使つて、結果のあるやうにする。其方面を、異
ふのか、通例である。大衆を、平へて、行くもの。思ふ、すべし、
大才を、要する。寧ろ、平凡の人が、よゝい。場合、は、洋山、ある。

徳富蘇峰

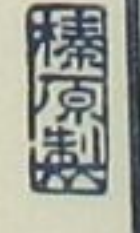
但し、統率力、が、付、無、く、い、る、が、何、ん、と、い、ふ、も、政、堂
の、運、動、が、行、く、の、み、あ、る、か、ら、政、堂、の、政、歴、が、あ、る、門、地
が、無、い、ら、う、と、ぬ、政治家の、資、質、所、も、宜、い、大、分、変、つ、て、来
た。大衆政治家の、墮、落、の、往、々、及、此、を、起、し、て、少、数、者、の
制、や、英雄政治家の、變、替、する、こと、も、あ、る。その、場合、
は、英雄政治家の、政治家、と、い、ふ、も、ムソリーニ、や、レニ
ンの、如、き、い、凡、物、が、い、ら、い、が、あ、る、の、み、無、い、と、い、ふ、
れ、も、あ、る。大衆が、政治家、と、い、ふ、も、智、識、階
級、の、昇、格、する、の、み、あ、る、の、み、あ、る。木、下、政治家、と、い、ふ、
統、率、者、も、殆、ど、大、人、材、と、い、ふ、も、あ、る。何、ん、と、い、ふ、も、
政治家、と、い、ふ、も、あ、る。大、衆、が、大、才、と、い、ふ、も、あ、る。材、能、あ、る
もの、寧ろ、力、を、此、方面、に、投、ず、る、べ、し、と、い、ふ、も、あ、る。

○高ゆき故松本重物と云、梅屋：遊八午時候
内を流る午おの響をこ言け、梅あつと云心
歌書と云る、真をそく貫らぬと云けて後
の、高し退得意のち羽給も大方士ハお
撲、秋古古をつける回も大相撲を果
立と五六輩一の小相撲を流：撥しつ画
筆改領より一其の上：題しつ句云
初代古浪り附けをそやわらうと云
新年唐子の勅題：題しつ句云
鳥羽伝の筆の思ひ方大空宮名合の書
時代を思ひ一七七十二の節：此の滑秋
秋とすし一其のワリりのあつる相面
杯の雲



の二枚教りたるを彩巻を施し書きぬるが
入り併せし世々らひ受く、杯の實と云は
しそゆる味をそゆる味に空なる
り香を教り頂の美入をこ真の味と云
の味味は石：高し、えへ此年の秋の心也
唯：松本重物と云るが故と云思ひ物
酒の在木真勢の風をそゆる雛冊と云
り出る、其の真勢：三巨巖の屹立する不
あり二義おおしと云から二見の空の心
こんと三の空の名と云る、上二日を
下二義の空の心と云る、

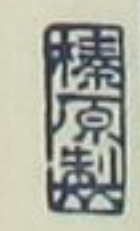
ぬらひ潤すゝこゝみ先まかすかちをます人七國徒
 ちあるまゝにねえな●ねいしうま焼くまうてひある
 道通に金作物を舞ふわけを人とうまかひたりま
 ずい強くあひかちいせん陽氣のまかあつて●華ま
 ぬらひね●ねいしうま焼くまうてひある
 者のちまうこゝこ人をおけるるる隠替るる殊
 へ訪客のあはれとまゝやうまゝとねこ位木を挿しとま
 ぬらひ●今まむせまをわらう●ねいしうま焼くま
 うまへ外見からいろくのまか訪ねて其のねをま
 して●ねのなげまをまのまの●ねいしうま焼くま
 思ふのこ支那のまひ●五月焼くま●ねいしうま焼
 めいしうま焼く



の道通の巻へ例の山葵が清流こいけつとちんこ
 してぬらひなる氣が附いて目も熱かへれ●ねいし
 中のあやめがまをまをまとして●ねいし
 いくら熱海●ねいしうま焼くま●ねいし
 今泥あやめのまをまをまとして●ねいし
 けいし●ねいしうま焼くま●ねいし
 のまかまか●ねいしうま焼くま●ねいし
 花のを肥料をまてて●ねいしうま焼くま●ねいし
 つた●ねいしうま焼くま●ねいし
 来城●ねいしうま焼くま●ねいし
 ところまかまか●ねいしうま焼くま●ねいし
 といまか●ねいしうま焼くま●ねいし

であらう

○非の栢園を修め途中、丹那隧道の入口を
こきり。目下瀧んじよの左に、磯及が敷設さ
せんがせに、遂道を出てゐる右方の、夏に貯る大き
く左方の、その、其の、土分の、一も、うい、泥の、よ、ひ、ある。ま、
大、波、の、ト、ン、子、ん、内、の、毒、瓦、物、を、放、出、さ、す、よ、う、な、
波、の、あ、り、な、い、と、言、へ、れ、ば、成、さ、し、と、こ、の、ト、ン、子、ん、の、如
き、長、距離、の、ま、の、ま、の、貯、り、後、付、も、か、要、す、深、さ、う
な、つ、め、れ、れ、此、の、ト、ン、子、ん、の、工、事、の、困難、は、有、名、じ、あ、る
が、奥、の、地、質、の、よ、う、な、所、か、あ、る、ま、ま、山、崩、地、と、防
ぐ、に、他、の、地、質、の、よ、う、な、四、倍、七、大、き、く、六、牙、ち、と、こ、一
セ、メント、工、事、を、施、す、必、要、か、あ、る、と、聽、れ、れ、此、の、ト



ン子ん中、い、は、け、い、の、了、切、が、式、十、所、も、あ、る、噴
火、の、高、さ、あ、る、今、ま、ふ、れ、や、う、な、所、も、あ、る、起、工、の
場合、投、入、の、意、像、も、つ、つ、ま、い、の、こ、と、が、續、り、起、つ、れ
と、思、え、ん、が、本、報、離、ト、ン、子、ん、工、事、の、容、め、あ
ら、ま、い、の、こ、と、を、今、更、の、や、う、に、感、じ、た。

○北海の海を埋むる計画のあつたこと、二三年前
から、早、う、て、あ、れ、れ、を、あ、る、定、地、を、見、ると、既、に、着
手、さ、し、て、セ、メント、の、比、つ、に、大、き、な、ブ、ロ、ック、が、一、直、線
に、海、に、突、出、し、て、あ、る、し、土、砂、を、運、び、い、れ、た、所、も
あ、る。此、の、埋、ま、る、丹、那、の、ト、ン、子、ん、か、ら、仕、末、に、困、る、程
の、土、が、あ、る、か、ら、多、量、を、運、べ、ば、自、ら、埋、ま、る、や、う、な、取
向、に、都、合、い、よ、う、な、事、は、ひ、ま、の、如、北、海、埋、ま、の、為、め、に、式、十

何の土地を得ても何時も漢の瓜分を定むることを
免れぬ。そこは初めから革命論であつたが、漸く消停
して一旦の着手して革命更なる亦強烈の反對が
起つて今の革命を中止してある有状である。漢岸
附近の各戸の埋立革命反對と標榜して来れども
くばりつけもある。其の消息がわたる。折角漢
漢の二言人の絶望や飲食店も眼も漢かぢんは
こそ瓜分の瓜分を定むることもあつたが、
向て埋立ると、将来とこゝろの革命が出来
とすると、現在の漢の革命の革命の革命を
おぼやかしから、反對するものも無い。宇宙
の漢大夢想狂と云ふもの世界のどこにもある。宇宙



のこと世界のことを懸念する。空論の空論、馳せるこ
とも面白くない。従つて其の革命を考へる空
論と嘲けられようが、時と運と革命の現を
あるから、革命を考へる空論と云ふことも
けである。空論の空論と云ふこと、其の空
論の空論と云ふこと、其の理想の貴い所以
期ての中人の革命の革命の革命の革命の
この革命の革命を考へる空論と云ふこと、
るんといふことも、革命の革命の革命の
れこと、其の革命の革命の革命の革命の
るんといふこと、其の革命の革命の革命の

志家が先から勝利を得たのことに凱歌を奏してお
る。さてセチーヴに四回際臨むの言談所がどうある
世長めの問題にこゝに扱かるとすると、誇大な喜
悲連が交る群がり来りの自然の勢がある。新
月活戸をいともあつた物を扱南に比か此の妄想
達が頻るとやつて来て、熱心いろいろのことを持ち
出し、女の態度に毎年多くの時分を費し、此の
又の閉じりと東西を解いての著に、こゝにこゝに不
トとある。女の室志家のいふ所、百端があるが皆世界
的である。或い超世界的である。あるは術の類である
婦人の月界と交遊するに於ける機械と互風し、此ら
女の模範を促すに三つ著の資金と四回際臨



野から出して歌い、と語る。又ある婦人の地を伊太
利に相して世界的都市を以り世界の文化をこゝに其の
美を中心として世界に特攝するの案を呈して世界
の交換型を以る位る金に四回際臨むから容あふ
出さるるものなり。或る人の一部種々の著
書と持ち来り世界共通の道徳。此の冊
本、又巻くねまうしてあるから、此が物が流布してこ
へん。幾多の著書と起るとして出版を徳
憑いたともある。其の内定、版権の扱言を集め
こゝに過さるるものなり。或い音楽の譜を弄るとか、
母界に共あるものなり。又子を考あつてとか、世界
の宗教の考あつてとか、ものゝ無んがらうとか、四

際臨^まる^るを^て祈禱所と設けよといふことき旅多の
 河魁も権きこんび^んを^て捉^ます^る少^くも^もつ^る方
 と多く無益の時間を潰^{つぶ}し^てある^るふ^たさ^くて^しく^く職^の事
 事務家^の難^い此^の類^を禁^めし^て得^らぬ^べし^く以上^は無^き海^の
 全^くに^て執^る事^を
 ○在^る朝^の日^を遠^くの^心に^出れ^ば此^の心^に刺^す遊^びが^ま夏
 化^が有^る、新^{しく}味^も有^る、^とこと^も多^く窮^乏も^ある^る、^と自
 氣^を吹^く、^と扱^く、^と日^の行^が柔^く、^と此^の心^に印^を
 そ^のつ^ける^為も[、]所^由も[、]未^だの^心を^治ま^す、^と此^の心^に印^を
 印^付け^が一^寸而^倒れ^ば、^とい^ふも^ある^る。

標原製

新舞踊

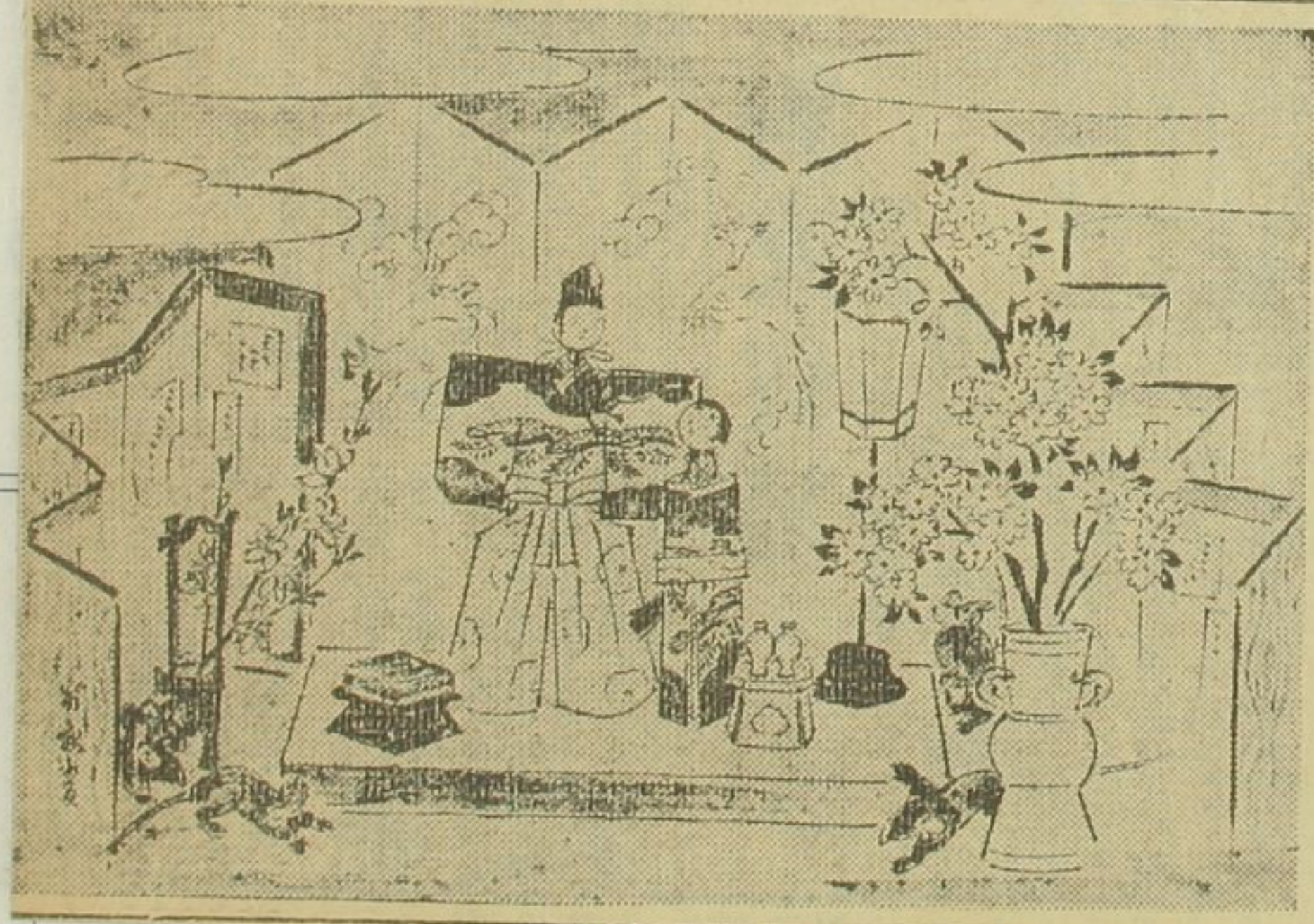
變化雛

文學博士 坪内逍遙
西澤笛 畝畫

【上】

舞台一ぱいの所作舞^舞、その正面に高さ七尺の金びやう風半
 双^舞、標^はは^は剛^剛剛^剛に描^いたる^風わ^ら來^來、その^上手^と下
 手^{には}、高さ六尺の銀ひやう風を、いろくの色紙、^舞面
 等^のは^りま^せ、半^双づ^つに^分けて^立て^回し、その^前、^二間^の
 間^はひ^なの^空、^常足^の二^重、^それ^にひ^毛せ^んを^敷き^て、^前
 面^{だけ}その^端を^垂らし、^中央^の金^びや^う風^に古^風なる^紙び^なを
 一^點立^てか^け、^その^すく^す手^に六^角の^おほ^ひの^かつ^た、^舞の^端
 等[、]又^その^前の^よき^ころ^に、^定例^{通り}、^紙手^を敷^せたる^三方^と、^三色^三重^のひ^しも^ちを^敷せ^{たる}三^方と^を敷^き、^すつ^と上^手
 には、わざとひな^をは^つて^古風^{なる}青^紙製^の花^瓶に^桃の^大
 枝[、]同^じく^下手^{には}思^はる^るし^の大^手を^けに^桃の^大枝^が投^げい
 れ^てある[、]但^し桃^の高^{さは}桃^{より}も^二尺^がた^低く[、]す^べて^小道
 具^は人^形の^大き^さに^釣り^あふ^{やう}に^大ふ^りに^製る^こと。
 舞^のあ^かめ^うち^に、^曲雲^井の^一節^を奏^し、^よき^ころ^に幕
 を^あけ^る。ト^常舞^神になる。

常へ小夜ふけて火影なまめく金びやう風、うち
 ぞゆかしき桃、さくら、ふた木のなかに立ちな
 れて、幾代懸にけむ早ぶる、古紙びいな二柱
 へその爪はづれたれひこり、つひぞ見たこと生
 卵



常へ般に目鼻やまじく、懸には疎き顔なが
 ら、立つもころぶも一入づれ、離れぬ仲はのり
 細工、しやちこばつたる窮屈を、しのび兼言
 ささめごと、もたれつ、寄りつ、うなづきあひ、

そツこびやう風の八重垣を

ト女夫の紙びなが、互に離れちをしようといふ思ひれ、科介よりしくありて、ひな白からヤツとこことおる。途路に海下ロ。バタ／＼になり、ト手、下手より縮むるみの眼五匹。いづれも子役、そのうち二匹は舞臺師が球乗りの子がを籠ふこと。高き所より飛びおるのもありて、舞臺に下る。

常へぬけ穴は、羽目にも一つ、壁、天井、二つ三つ四つ、いたづらもの、ねらふは菱もち、ミツぱくさ、ひけばはずみに瓶子まで、ガッタン、パツタリ、南無三方を、ころげおちたるものもちに、こちも縁ある姫のり仕立

文句の通り、思ひもあはれる。紙びながころげおちる。もちが三方と互にひつくりかへる。紙びなが逃げ逃び、ト手の眼びやう風の前にてけかへる。

常へかちられては大變こ、うろたへ感へご木偶の坊、たごけかゝるばかりなり折から家鳴り震動し、倒る、びやう風消ゆる燭、びつくり女夫てあいたしこ、重なりあうてぞ伏しまるぶ

ト大ドロ／＼。ト手の奥にて「ニヤアア」といふこの聲。大バタ／＼になり、ト手の眼びやう風を仕かけてひな白へ倒しかける。腰をさした花嫁がころぶ。それを助けようとした紙びなは倒れかかった眼びやう風の下へころげ逃す。

ト上手奥から虎ぶの大ねこ。但し手前、式の如くう高く縮んだひらめんの首輪、眼の盛つき。が金びやう風を倒れた眼びやう風の間に飛んで出る。

常へ紫宸殿のぬえごころか、村の牧場へ虎ぶのねこ魔へびつくり敗亡、ちゆう／＼こも、右往左往

に逃げはしるを

ねこニヤアア

常へにやらぬ／＼と、追うてゆく。文句の通り、ねこは眼を返す。思の子役中の舞臺師いろいるケレンをやる。面白き立回りよろしくありて、トまねこは眼を追うて下手へ入る。

常へ春日野は、今日はな焼き若草の、妻もこもれり、こもりづの、びやうぶの下ゆこはくも、はひだして顔見合せ

ト紙びなが、倒れたびやう風の下から様子をかじひつはひだす。但し女と男と別々のところから。二人とも着つけの舞臺師が以前とは變つてゐる。男は金冠がなくなり、手も足も立派に動く。女も、袖もち式の着を帯と共に脱ぎ捨て、手も足も動く。身軽ないでたちになつてゐる。

男へや、不思議な！こりやどうぢや！
女へや、今時の騎さが物性の幸、このやうに帯が解け男へ脚口も綻びて、手も女へ足も

常へま、なからだごなるからは、もう毛せんはさらんばん、寝る時やいつも別々の、木の丸殿も住みわびぬ、よしや如何なる山里で、つま木ころこも、君ごなら、手なべさげよご終の宿、求めていざや吾妻路へ

ト文句の通り、紫宸殿と二條の目を連想する色合ひの振事ありて、ト男びなが女びなを看負ふ。
常へはるけくも、きつ、なれにし旅ごころも看負うたる女をおろす。

新舞踊

變化雛

文學博士 坪内逍遙 細木原青起畫

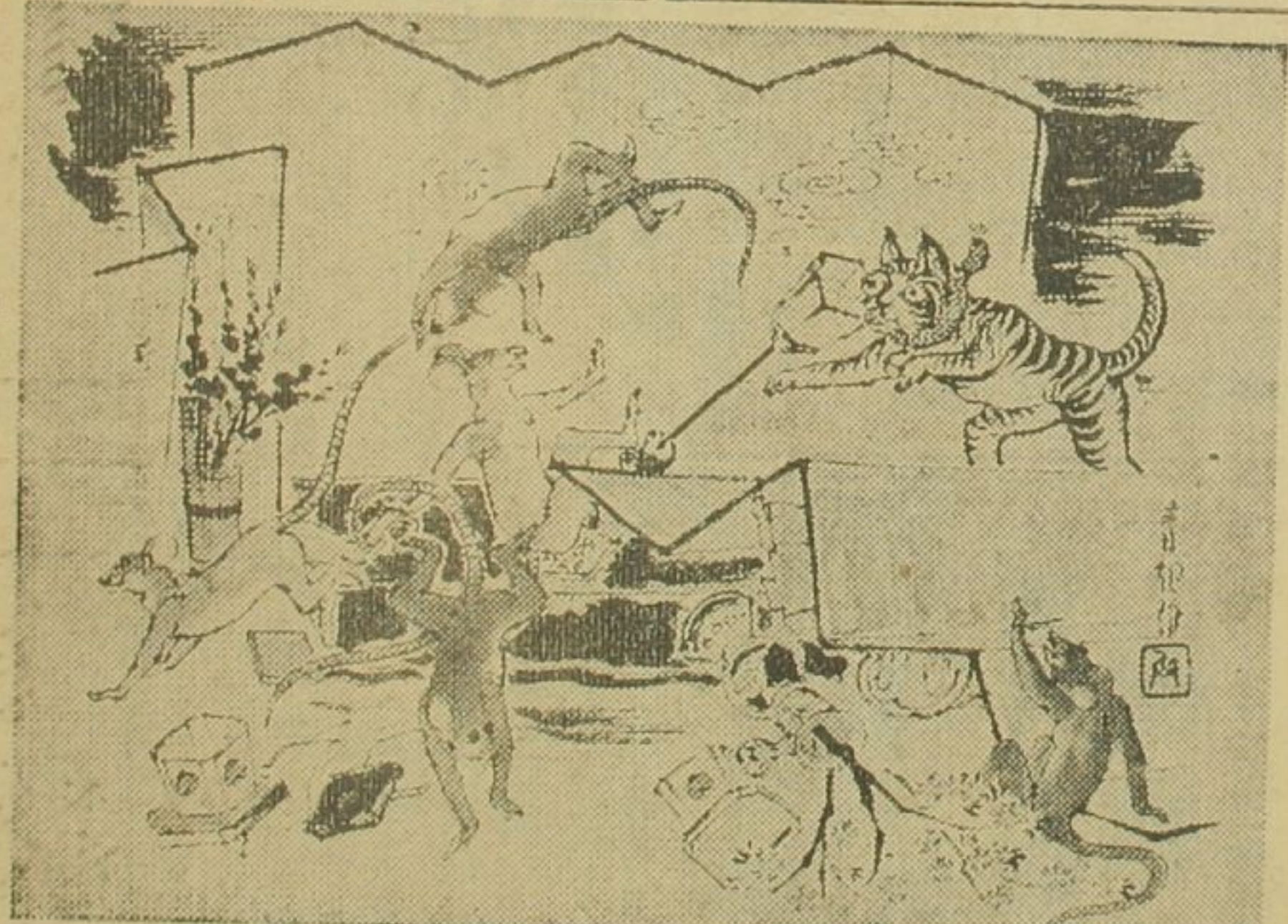
これ戀ゆる、戀こそは、神もいさめず、戀せずば、玉の杯そはかこ、迷ふも戀よ、君ゆるに、世を忍ぶずり、こやかこ、亂れ心の人の身に

ト紫宸殿のぬえごころの道行きよりよろしくありて、トドまねからぬ浮世を驚くこなし。途路に又大バタ／＼、下手にてけたましき物音。

常へ似ぬや二匹のさかりねこ
下手より以前の虎ぶのぬわこが野良ねこらしいいししの雌おこを追ッかけて出て、野良にとちくるふ。

常へうらやまし、人目物かは、あくがれて、夜晝わかぬ妻よばひ浮かれて、あばれて、かき破るへびやうぶ、ふすまや、たなからは、ガッタン、パツタン、ガラ／＼、落すなべ、かま、皿、小鉢、へごちぐるうてぞ一さんに

二匹が荒れ狂ふはすみに、ト手の眼びやうぶと一しに桃の大手をけが倒れる。紙びなは驚いてト手へ逃げて、金びやうぶのうしろへ隠れる。ねこはますます、ねこが金びやうぶの下手のうしろへ逃げる。それを雌ねこが追ッかける。途路に物の落ちる音、せむ物なそのこはれる響き、金びやうぶが動揺



常へあつても世をふるごころも、なまじひの、人の巧みのおろかしや

する。倒れが倒れる。トド金びやうぶが横たふしになりかける。ダイク・チンヂョ。ト手にてねこのさかりねこ。

だんく明るくなる。トびやうふその他一さいの小道具は
かたもなくなり、舞台一面が秋の野の景色を描いた大ふすまば
かりの廣間。

常へエ、まゝの皮ぬいてくりよ
中央に男女の紙びなが、天地に居て、上手をうらやましう
に見送つてをり、ト下立上り、いッそこんな窮屈なものを脱いで
しまはうといふ表情、科介よろしくありて、引きぬくと、女
は断髪のマダーン・ガール、短いスカート、すべて最新式。
男も同じく現代様、但し表はかまたげを脱ぎ、どうしたか、
大口を脱ぎ残してゐる。それが不潔にラッパズボンのやうに
見える。

この引きぬきの間に、正面大ふすまのヤト上手寄りのところ
へすみぐろに「芥川」を書いたほうを赤く心をせりだす。
女へこのほうが断髪いゝわ。わえ、シークでしよ。あなたの風さ
いもともスマートよ、まるで見ぢがへるやうよ。
男へだが、かゝらなつて見るとト正面を見返つてあんな背中はア
ナクロ過ぎて、馬鹿々々しいぢやないか？（トほう赤く目を
つけて）第一、あれがしやくに障らう

トつかくへ行つてほう赤く心をせりだす。トそれが脚れて、
中から靴子が出る。野球選手の靴子が出る、大短いやッソル
が出る、ハンド・バッグが出る。
それと同時に正面の大観衆がはね上つて、大ふすまがごと
ごとくふ返る。ト一階に復興大東京不忍池畔の觀劇り。
女はこの背中に見とれて
女へあら、まア！ すてきなことわ！（山下を見て）おや、靴子
ト！ あら、バラッソル！ わたしすぐ利用してよ。（ト靴子をか
ぶり、ハンド・バッグを手にかけ、バラッソルを取りあげながら、男
の姿を見て）おやくー、あなたまだそんなズボンをはいて？
アツト・オフ、デートぢないの？
男は初めて気が付いた思ひ入れ。

男へあー大口を脱ぐのを忘れた。
トあわて、大口をぬくと、胸へマークが出て、五分もすかぬ
野球選手のふん装。
常へ姿ばかりかイデヤまで、超モダーンの妹背
仲、京九重から東京へ、一千年を一飛びは、ツ
エッペリンも何のその

ト女は男へ、持つてゐたバラッソルを脱ぎ、それをバツト、ハ
ンド・バッグをボールに見立てた高座の藍れ。
常へよごさんすか？ 投げてよ！
野球を連想させる台の手（観衆の聲ならにつれて、よろ
しく。

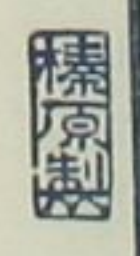
常へごもすてきな軽業師、アクロバットやフラ
ツバア
男へさ、チャルストンを一章
二人、あるひは一しに、あるひは別々になりて、ヂ
ズ・バンド式の台の手につれて滑り、離り、くまらり。
常へラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、らんまんごさく木
や草の、花から花へ夜もすがらまた日もすがら
ひらくと、てふは香りを、蜂は蜜、たゞきや
う樂をおいらくの、來るてふ年を夢にたも、見
ぬや遊びの果しなく。

ト寄りつもつれつ、よろしく振ありてをさるる。
ト男は女の腕を左のわきへかゝ、送つて、二人並んで立身。
男へぢや、これから何處へドライブとしよう。（ト正面をキツと
見やり、やがて右の手を高く擧げて、指を一つ突き大きな聲で）
ロードスター！
聲なく観衆の背、自動車のきしる地ひびき。
幕

標高製

○折々の書物の年記記せえん殺生湖白行状記といふ
一談を值する珍書もある。殺生湖白といふ、秀次
の事もある。そしてその折々の書物から、秀次
秀次に近づくといふ件（天草）も、因つて書かぬのぢあるか
ら、さういふ意味もある。若者の情けあきま、擧ると、
若者の名はルイシ、フロイシといふので、三十一歳
日本に來り三十九年、日本に在住し、戦國時代の
夷鬼（鬼）を目のあたりに見たとある。若者あつたか
ら、さういふ件を引くと
さういふ件、三十九年、日本に在住し、戦國時代の
夷鬼（鬼）を目のあたりに見たとある。若者あつたか
ら、さういふ件を引くと
さういふ件、三十九年、日本に在住し、戦國時代の
夷鬼（鬼）を目のあたりに見たとある。若者あつたか
ら、さういふ件を引くと

開校の治を二侯に命ずるを、これを捕らひしむる
とき、人びと、さきさきより車輪のめぐるが如く、吾
が支利支丹宗門も、之に従つて波瀾止むこと
がござらぬ。是れがしるし、任弘法の東西に馳
走し、支利支丹より大石武士との交り、ハ
更らる。今、亡い公方様も、後醍醐天皇の御
親しう見え入る。太閤様も、木下義春
の若らも、御意得たり。是の御案内、白秀次公と
は、かく、城人の執事より、加へて、都の兵亂、法
皇の命、教も、又、支丹、直り、此と、一、二、三、のハ
惟任の向守が本、~~様~~討入り、の、是れ、か、保
り、此中、の、こ、ご、り、な、り、



と、あつて、重要の要、邊ハ、皆、目、睛、耳、鼻、と、あつて、
知、る、の、本、能、寺、攻、ま、身、を、挺、と、此、れ、が、あ、る、納、屋
の、芳、木、堀、に、隠、し、て、お、も、と、成、砲、を、打、ち、こ、も、ん、れ、か
不、思、儀、と、助、あ、つ、た、の、ハ、津、の、お、り、降、死、と、い、つ、て、あ、る。
此、ハ、テ、レ、こ、も、う、つ、の、日、本、を、こ、も、ん、が、若、あ、つ、た、日、本
歴史、も、あ、る、あ、つ、た、や、う、あ、る、不、思、儀、な、罪、行、の、多、い、人
の、行、日、状、を、書、き、お、も、つ、た、動、機、ハ、恐、ろ、く、人、の、懺、悔、を、促
し、つ、つ、た、罪、を、犯、す、ま、じ、き、教、訓、と、特、に、秀、次
の、事、跡、を、書、き、お、も、つ、た、の、ハ、あ、ら、う、が、彼、れ、自、分、か
ら、あ、つ、た、こ、も、つ、た、秀、次、の、行、日、状、を、細、大、海、を、書、き、
う、し、て、の、標、高、の、助、平、を、あ、つ、た、こ、も、つ、た、勿、論、ハ、あ、る、と、
ん、ご、つ、た、彼、れ、の、右、の、如、く、お、も、つ、た、

えんかゝ如何に面白款の心算とハ申也、考在左
此侍し等むるけん心所行の一事を辨へうん
たすし、且つう所詮異邦人より、此邦の人の
前日日本の言多を使ひおけりする由もま
し、思ふに物つれところむいはいこいこ
ケルとす日本人の伊留満あり、五奉行の
一人前田徳善院が甥御にえんかゝ面白
款がおおむとす、御最勤の際まむ仕へ
まぬらう、此のころ、とうとうの支利支丹
ころ、主の亡い後の世を捨て、御門流に今
年来伊留満の修行観念を、未だ若輩
ころと異才を抜群のあるんが、えんかゝ見



ぶり、さうを口授せしむる業を執つて之を
書し、躬が知らざる、彼れが福ひ悉しかる
る、忠信を如く、所詮、更ん合心と、よくと御
説せえりする、一命の物語を編しうつる御
存る。

右のころ、ちいさの、邦人が助筆ト、ト此とありて
ハ此物語ハ初書り、信が四重め、り、此の物語
の書り、此の書、未だ、即ち一五九六年十二
月二十日、長崎に於てある。

自分、此の行状記の三分一、一翻、後、一
が、秀吉次物語と、此の上の、よ、む、後、代
深、意、の、行、も、忘、録、す、一、後、あ、り、は

へてしある所外人をむかひ出来難い事ひある。
秀次の乱行をゆくも忌憚りなく御覧に當りし
この日本はあつきのやうな思ふ。秀次の命を成
程の物神痛罵に執事する。役生閑白の名を好
し此等の秀次の利人をも自から手を下して斬り
こいる事とを味とす。大切なる近侍を目前に殺
いせその血の流るるを見る無上の樂みとし此
どハのオロを思ひし事。秀次が敵を起し
あつきの女身が大関に抱かれ一夜伽を由義を
せんれと云ふ疑念が秀次と敵人とを疎隔し
漸ゆく侍女を弄ぶ淫行が始り侍女の身体
検査に十人のみのりきまの事りて一齊に

漢高製

浴場に入りしめ、秀次が突然全裸体でそん
れい入丁、各々を品騰すもあつきの子口の再来
といふ事と云ふ。大段城ひ秀次が能と信
比時の、秀次と秀次とが舞臺の上は暗闇
か下のめき、折りあつて淀の手を左つて秀次が
つり出し、秀次が自分の手を取り取つ能を
のけりお見をあやめし事、小便を垂れて秀次
の衣服を汚し此の侍の事が駭きえつて女あつ
ありさうな場面也。若者豊公の多の事を養
を猿猴の如しと嘲り、秀次の四投を較べて
泥の差あつて云ふ事、保く豊公が拍楽と云
ふべき所を拍楽と言ひ誤つたのを、流石に

蓋不佞大忍も吹出しとあるが、殆ど其の先の素を
るが如く融の一言も「特々集芳の具をそつ」つ此大は
と秀次の間柄の事と此吹が被刃始めを終に「高内
山」に於ける「高内」の暮ま入るのみである。

全書通後の後あきまは此物語をどこまでかすやま
間もかこんであるかおれまは感あ得い秀次とい
主人公の性格が七とく変態であるからである。女人
也華酒を特とする比叡山に狩獵をやつて僧の酒
をすゝめてあきま其他婢女に裸体の乱舞をよ
大いあるまきまは説くか思はんぬか小説といふ
小考一ありそりまもろく、読るモダレンの考きや
うかあるのい故らうかせん此。確らう此の物語いお



説とも成りしといふもある。秀次は小型の子口む
●本より珍らしい人物、此人を主人公と提へたことが
よの着眼の小説とも成りし此の古史の原因す
こ併し記すの内より、淫く史の缺漏を補ふるは
この心あるか思はん。バテレンの千年を考むる
から、**書物**の業夜味の濃層をむるのここのは、**書物**
の事である。

一月十日記

以上の小考をほんいかん人の千年成りたるいもうその観
あるんも再考あるま外人を托してあらしむら
しく思ふ。こころを前の外人のこころおもしろ
味ある。こころをいさかいたし、世に考むる者
の指手あ外人に托して人を説くよ。

法律が酒に負けた

嘆きの禁酒國

アメリカの苦い試練

實施十年・醉へる統計

が 國 民

【ニューヨーク特電】六月廿日 禁酒問題にまぎや露でも、露國でも大衆の眞ッ聲中

米國では十六日禁酒法實施の十年を迎へた。この十年間の禁酒法實施は米國に何等もたらし

たか、禁酒法は果して米國人の生活を向上せしめるに實効たらうか、抑律中禁酒國とはい

ひ禁酒法は禁酒法に不自由したい、酒は禁外から流れて來り現存である、米國政府は

府は過去十年間にわたり禁酒法を施行すると共に、四億ドルの巨額を費して禁酒法を施行した

結果は卅億ドルの輸入を失つてゐる、さうしてこの期間に禁酒法違反で拘引さ

れたものが五十五萬人、その内投獄されたものが廿三萬人、しかも

ニューヨーク警察の統計は禁酒法施行以前に比して犯罪で拘引されるものが三割増加し

刑事裁判手続が、禁酒法施行後から十倍となつたといふ事を見せる

なほ別の統計によると過去十年間
に禁酒によつて生命を失つたもの
が三萬三千人、またワシントン
（ワシントン）は
次の如く報告してゐる

イーチがある一種の秘密酒
場で人ロムルを押し出す口の
穴から血がのそいで見知りの
お祭り中に通ることか出来
るまだ海岸警備の役人の目で
は相違に驚かしてゐるに拘らず
この警察官を買して通販する酒
買輸入船が大連洋行船だけで
興へた國民は野蠻的強手だ
にたとへような禁酒法には

百五十隻あるとのことだ
なほニューヨーク州代表下院議員
ラガサチ氏は十五下院で禁酒法
でも現在三萬三千のワシントン

【札幌特電】酒川船は上海定期
だつたが同船は昨午有以來麻雀の

議會でも叫ばれる禁酒法反對

「スピクイーチー」の怪

開く秘密の扉

ベルを押せば忽ち

イーチがある一種の秘密酒
場で人ロムルを押し出す口の
穴から血がのそいで見知りの
お祭り中に通ることか出来
るまだ海岸警備の役人の目で
は相違に驚かしてゐるに拘らず
この警察官を買して通販する酒
買輸入船が大連洋行船だけで
興へた國民は野蠻的強手だ
にたとへような禁酒法には

討論中「禁酒法は死んでし

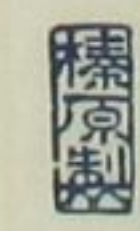
まつてゐることといふ意味の言葉を
擧出して賣進を察かした同日
ニューヨークの禁酒法執行委員
員長アイムズ・フオックス氏は
大總統フーヴァー氏に對して「禁酒
法は國民に對し一種反動の暴分を
興へた國民は野蠻的強手だ

麻雀の密輸入

にたとへような禁酒法には

Blank lined writing area with a blue border.

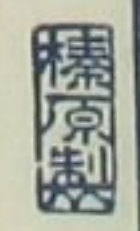
○此夜家畜に扱ひた家畜の居るは標先をがの
 地へ支那に遊べれば頃のいさくの話をしに中
 屋山を中心としてある出たに。ある日少し
 ばかりの馬を物と扱ひておくしあるに
 と野放しの牛が二三頭、同じ方向に歩んで行
 くので、馬を物とそと牛の角、いつかして、自分
 が果をして美で満足すんが、いひあるの、
 どうせの事は、自分の身体をも托さうといふ
 氣あるうて、その背の上で騎つに、牛の平氣
 どのをく歩い、馬を行く。美で満足してお
 らば、ふつに、今からいひのうくさい氣あるうて
 馬の枝の集んでつて、おのをも、牛の背の上か



ら手を伸べしと折り取り、美を鞭と一ト
 當てあてると、牛の背の上で馳け出し、か、とあ
 ともうく走ると、冷汗を流し、熱る、危
 を感し、これ、誰か出た、和之んを、云へし云
 ある人、馬の回、さか加減が、此一流む、毒保、現
 んとある。誰の牛とも、か、裸牛、又、扱ひ、
 一、馬物を扱ひ、さ、此、一、扱ひ、
 さい氣あるうて、終、一、扱ひ、
 悪徳を、さ、け出し、さい、
 け出し、怪我の、さ、つ、け、
 リ、さ、え、い、と、誰んを、恨、
 いと、自分、の、天、つ、い、と、自分、の、更、ま、さ、あ、る、屋、山

の途中のものをくや放しの牛が歩いておるのを見
て行人が北へ向うを拜儀するのを見支那の風を
見るの光景を、此の山を運んじりし比類今も居る誰
れかの日々の時のさまを畫のせし紀念とするもの
から、この山、（？）と打ち具はれ

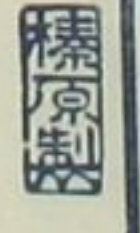
○田中序：入江幸吉博士あり其の手がけ
者家の珍多き麦穂性家あることを述べて
余、其の氏名の異々々掩ふれ世に又この山に
て巖既八十に達し性熱猫焼くを毎夜
妻妾枕席に侍す、而してぬち所、龍陽の窟
りと、余その人の関意の一端を述べたむと
今得しは、のち此の山常て酒所なるべしと



云々

○或の友人の云く日本は遠からず世界の冠絶するの
國と云ふんと、此の觀察の主眼と云く、日本は早
く東洋的文化あり、其の發達西洋のものと異るんと云ふのつ
から特徴あり、家屋の構造、器物工藝、（？）般手藝
類、未だ治世終、能其をオ西洋の今までの比つてある
て及ぶもの一つと云ふ、而して之れを加ふる
西洋諸島の長する所のもの、皆を採つて、（？）
美術、演劇、美術、略々皆をオ入るべし
西洋の^{（？）}一行の位、（？）の日の決して遠き
ある^{（？）}の^{（？）}が^{（？）}文化とするもの
を有する上は、吾が國の東洋文化を保護せむ
始

其の文化は、欧米のまゝに世界何
 の國をも起^てするものなりと云ふを
 謂へしと、是れ破れ一考察を、蓋し東洋の
 諸國其の國固有の文化を有するものありて日本
 西の西洋の文化を借^りて豊^に入^りんとす
 未だこれ無く、西洋諸國も今も漸^に其の
 究つて東洋文化に倣^ふんとすものありて、尚^も神保
 三在^るを免^れんべし也。併し爰に我邦人が留^る
 を要する世の風潮、誘^ひて西洋取捨の批判
 を誘^ひ、就^{して}可^らざる流行^と制^{して}洋に就
 き、彙^つ可^らざる我美風を無^き着^て彙^つこと
 ●東洋的文化は日本●の誇^りとす文化



七拾

の保持が甚^だ危^殆の状^にあり、ことか、嘆^す度^の心^を
 へき^にあり。維新以來、欧化主義が一時、東漸し、
 元^來が為^め、深^に保持を要する我文化の或^る物を
 失^はひたるも、少^くとせ、近^來欧西の人々漸^に日
 本国固有の文化を、追^つて理解^{する}結果、存^存のそ
 やすものを出^て来^り、邦人々、許^さず、自尊心を生^じ
 浸^るに、欧風、この人々、固^にを換^へするの流^を受
 り、[●]如^き観^念も、今一、疑^念に留^る、[●]唯^も
 此^の國固有の文化の保持、力^をあるのみ、[●]其^の
 発揚、力^を注^ぐ、[●]其^の歐風^の文化と、今^もい
 て美を誇^り、[●]其^の恐^ろく、[●]其^のあ^つか^いん、[●]其^の
 其^の東洋文化、在^るた^る、[●]其^の其^の

民の精神である。其の精神我々の精神の基礎
を成す者なり。寧ろ世界の諸君も是の如く其の忠
實義烈の風は世界の諸君の所望なり。動もせん
西近未新の如くありてある。あゝき思ふ所の如く
化をえて君心とす。傾向もあらん。地球も
あるを要す。先角四の如く文化の泡沫
の如きものあり。只これ概に武備の四角を棄
てて、世界は一等四の地位をもち得るとも
國民其の負擔を減らすんが四の何れの如く
つて中を圓り得べきを、日本は世界を冠絶す
文化の相をあると云ふ。唯此遠くも其の
此の如く現を見る。しと云ふ。あつて大いなる考

藤原製

暁を要するものあり 一月十九日記

嬉し、はつきり聞えた
われ等が若槻さんの聲

世界的レコードを作つた JOAKの大殊勳

二十一日、英京ロンドンでのローヤル・ギヤラリーで開かれた戦時時代の諸君の海軍と空軍の光輝がラヂオによつて全
世界に放送された、JOAKではこの模様を仲繼しようとして北村技師長以下係員が汗だくで準備に
忙殺され、放送室には中山事務理事、矢野放送部長、日本放送協會本部からは高田技師長、尾山技師長が詰かけ、外務省からは一々
要人に翻譯して一般にきかせようと顧問メドレー氏、鶴見書記官、岡井、好實、山田事務官が出張してスピーカーの前に陣取つて一語
も漏らさじと鉛筆を握る、午後八時スキャッチは入れられたが聞えない、八時十三分ようやく電波を捉へたが、聲音が多くてものになら
ない、常務以下の面上にかな不安が漂ふ、九時が過ぎた、九時半になつた、それでも聞えない、十時！果然「この記念
機全權の聲である、放送室からは時ならぬ歡喜の聲が湧く」

「吾人は英國が本會議の召集を誘致せられたるに對し、眞摯なる……」「平和を永遠に樹立し、國際協力の原則……」「國民は戦争の慘
禍及び苦難を除き……」「國際關係における公正と正義との保障……」「日本は平和政策は……」「露府會議において確的に宣明」
力……これ平和達成の……防衛するに足る権度の勢力を保有……」「充分なる成功を収め……」

と断片的ではあるが正しく我等の全権の墜である、かくて十時十二分に演説を終り、憲法部長の演説に
 移ったこの時分には益々はつきり聞こえて来る、地獄を降にする日本と英國、地球はせはめられた、全く世界的レコードで
 ある、AKの殊勲である、かくてロンドンからのウエーザは十時二十五分に切られたが、この放送は完全に我
 國の津々浦々に送られた、北村監禁部長は驚。
 準備としてふ始めに試験した位で、かういふものを出しぬけに仲絶するのは無理です、七時のテストで大體の見當がついたの
 で放送を始めることにしたのであるが、現場へ響かれてから感度が非常に落ちて困った、元來ドリーチェスターは電報をもたぬので
 あるが、我々の爲めに好意的に電信の装置を利用して臨時的にやつて呉れた、初めのうちの不完全はこんなことからでファン諸君の
 期待をいさゝか裏切ったが、しかし若狭全権のこれだけ聞えたのは成功した方に思へる。

○今の教軍中
 三、隊兵隊長に入つて今湖令中
 の沖縄縣の風土度況を其の風俗を
 示す考は、倭領帆樫林と首を都人往來の
 交を現り、一月二十日編と習くても
 くの女子隊を以て盛村特と市中を練り
 歩くもの、ペリリ首を、列着行列を、



市中をこくつ所、舟着身大の人形と珍意を、
 今一と或から其の、接するの思も、倭領帆
 樫林の舟、中、珠、異、彩を、旅の、大、舟、冠
 船と名くるもの、琉球王を冊主、以、折、支、那、が、洲、を、
 以、の、れ、ペリリが上陸、以、時、琉球の所屬か、外、
 事、を、ペリリは、止、が、見、え、し、以、か、米、田、不、属、と、一、時、
 の、れ、に、は、こ、う、と、思、ひ、出、せ、し、多、く、拍、音、を、
 陣、列、し、れ、中、に、お、目、を、奪、く、あ、ん、漆、各、と、揚、物、の、
 揚、物、の、あ、ら、琉、球、考、族、の、ち、花、白、子、出、お、の、麻、
 の、地、の、多、い、が、深、く、も、と、紋、様、あ、ら、う、く、お、お、あ、
 意、近、が、あ、ら、な、古、書、や、昔、草、七、少、か、う、列、
 さん、お、の、舟、本、舟、の、数、に、注、目、さ、ら、き、よ、の、ち、あ、ら、

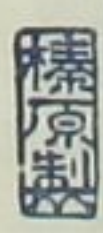
日くの色を充分為押ししあることありと説
き得べきものを見る

○外四の政治家は献身的に四務を執りしめて
る一身を顧みず暇なきもの。ムリに二をとりてか
つ時投じ甚しうせしめぬ危殆の立場にありて
挺身立する所を行つてゐる。勿論一身一家の利
福を以て毛頭顧みない。四民を率へて行く
よるまじの氣概と犠牲的精神が無ければ
この外四の政治家は出づりてええとあるが如
く某かとびつくりするやうな羊生天もせらる
ればたうおければ衣被を着け、懐くと恥つる所
がある。梁等の心掛は精神を赤裸にさらけ出



一七奉公のころ早も返るべきの事あるから、衣被
とを考へてゐる。皇が来る。幼く精神より大衆
を率へて行くやうにせよ。無んば、日本
も考へし政治家も、いんかあるが今も
無い。

○外四の結核漢書を説き及ぶ政治家も、
多忙の爲の支人と漢書の皇が来るのびん
田印する。この日本の政治家も、
難い事とあると、そこには、
き圖書を制限し、某のものを、
と、其の部類の書物、
がある。獨逸の外、
がある。

といヒスマリーフとナホレヤンとゲイテニ漢字の
まのけを讀むこととしおれといふが、
擇ハ、
と日本の政治家の懐情を讀書の趣があつても
後、
他を勵むる一書の前録は内閣の首班び
の顧問とする月取巻の政治家の方の人を
も七字調であるから、
も狭隘である。大隈英を流石と執味が度
かつ、
究一、
と悉く得た、


度と訪ひ、
此よ、
無い、
する、
外、
ま、
赤、
何、
今、
以、
と、
こと

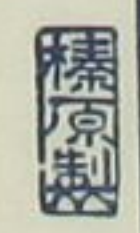
可成表かつてある状態があるけれども所謂百歩
一見の差が少し進んで不惑なト是を入ん実状
を穿破する事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
い方便である。レニン一輩がマルクス主義を事
行つて見れば、まが今どの程度に行かんと
か、既にとんと出たのか、尚ほ進んでいかに
ふてあるか、その実況を察して見ると、實
あるか、マルクス論者か、（中略）志を
しく裏切らる。再々、このことである。實
松とレニン一輩の人々、既と疲ん切つてみる。不
疲んレニンは先づ斃れん。他の同志も進んで
然して行くを望むるべし。と云ふ事を継承す



こののんくは、あつてと云ふ光景の如くカ
よむるのことは切つてある。マルクス主義を
際々行つて結果ハ四を度弊と首すこと、目
に分つてレニンの施設を更改し、全死骨ぬき
ころのことと云ふ事と云ふ事。資本主義の米四か
十の教師を備へて、農作を指導すべし。或
ることと云ふ、度弊を救済するに志を得ざる窮
果の云々、（中略）既と矛盾である。レ
レニン一輩の創業者が進んで、レニンの
業も疲減し、内なるもの。政争の二三流
の政策として、毒味を帯びて、者を二流
派として、其の状況を研究すべし。め且つ研究

やしめてゐるが、其の結果、甚いよへといふのである。
入札の旨、これを意味を多ク流かへするが、是
が漸やく漸く、二年三年と、節制をつけ、し
める内、全く非を受つて、帰國の時、其の
交際、論議とち、のると云い、てゐる。遠くから見て
造る、内、畏怖するところ、官守、實地を踏む
方が防止の名業、である。

○若くは、往々誤謬、を陥ること、輕くは英國といふて
まゐるが、大ブリテンの二部、ある、エングランドを、作すの、か
大ブリテン、即ち、愛、蘇、蘇、を、如、英、の、領、土、全、部、を、作
すの、か、ま、ん、が、甚、れ、混、乱、し、て、頗、る、不、解、的、な、事、は、こ
と、は、其、の、つ、か、ぬ、こ、と、に、あ、る、ま、く、の、ゆ、え、に、ま、ん、の、



英國といふの、英の領土全部を、作す、であるが、外
交界、に、於、て、エ、ン、グ、ラ、ン、ド、と、英、領、全、部、と、ハ、裁
然、区、別、が、あ、り、ま、え、と、い、ふ、事、も、又、あ、ら、な、い、と、云
ふ、譯、ハ、エ、ン、グ、ラ、ン、ド、文、の、詞、題、で、あ、ん、ば、其、の、休、戚、を
等、と、あ、ら、な、い、事、務、格、格、等、も、同、様、で、あ、り、地、の、多、く
の、領、土、及、ハ、ぬ、る、い、か、ら、所、題、ハ、ち、と、同、様、に、あ、る、
あ、り、ま、え、の、こ、と、が、い、う、ま、う、と、エ、ン、グ、ラ、ン、ド、の、か
ハ、冷、然、と、も、其、の、如、く、顔、を、し、て、お、る、外、交、上、の
お、手、と、し、て、エ、ン、グ、ラ、ン、ド、の、み、だ、り、に、敢、て、事、と、す、の
み、是、ら、の、物、も、あ、る、が、大、ブリ、テ、ン、全、部、と、す、る、と
實、に、大、なる、力、強、よ、い、お、手、と、す、る、の、み、だ、り、に、英
國、と、い、ふ、二、款、の、意、味、が、あ、る、先、づ、二、部、が、全、部、か、と

質す要があるとは外交通(二)云ふ也

○日本から欧米へ游学し出かけたことあり多くハ高
い價と揚つて彼國(四)に圖書發(五)通つた。下宿に
きて花の七書物を讀むことと漢語することよか
多し。實に馬鹿な流しに九もいふ能はぬのことハ
い。書物を讀むことハ日本に書物を出來ることハ
ある(西洋) 得難い書物ハ別れハ外四
出うけて讀書(三)の日も費すすら書物なること
を(中)視聽することハ官下(六)大切であること
ハ言ふを待たぬ。そこで留學生と選(七)擇すま
喫食の條件ハ讀書を要し(八)まむ。既に充分書
物を採録(九)し(一)の書を賣り出すことハある。語を換



七云ハ(二)書生揚句のよふ事乃ち更々漢書を引つ
ても(三)漢書(四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(五)漢書(六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(七)漢書(八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(九)漢書(一〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(一一)漢書(一二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(一三)漢書(一四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(一五)漢書(一六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(一七)漢書(一八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(一九)漢書(二〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(二一)漢書(二二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(二三)漢書(二四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(二五)漢書(二六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(二七)漢書(二八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(二九)漢書(三〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(三一)漢書(三二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(三三)漢書(三四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(三五)漢書(三六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(三七)漢書(三八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(三九)漢書(四〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(四一)漢書(四二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(四三)漢書(四四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(四五)漢書(四六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(四七)漢書(四八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(四九)漢書(五〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(五一)漢書(五二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(五三)漢書(五四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(五五)漢書(五六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(五七)漢書(五八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(五九)漢書(六〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(六一)漢書(六二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(六三)漢書(六四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(六五)漢書(六六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(六七)漢書(六八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(六九)漢書(七〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(七一)漢書(七二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(七三)漢書(七四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(七五)漢書(七六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(七七)漢書(七八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(七九)漢書(八〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(八一)漢書(八二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(八三)漢書(八四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(八五)漢書(八六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(八七)漢書(八八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(八九)漢書(九〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(九一)漢書(九二)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(九三)漢書(九四)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(九五)漢書(九六)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(九七)漢書(九八)のよふ事乃ち更々漢書を引つ
つて(九九)漢書(一〇〇)のよふ事乃ち更々漢書を引つ

得る所が無つた。志かした塔の麓の為めは体験にこ
とど、物づく以上大切なるを得たの、如何なる階級
も労働をせんは生利し得るのと云ふ自覚であつた。
えん、其の頃、苦しい経験から来た。所有者の財産
をどの程に失ふは是れを体験してから起つた
の、西洋の女子が親戚を大に教育を受
くさるゝつたこと、**●** 著しい事であるが、彼等
はいざと云へば自分の力で生活するけんは、**●** 女の
自覚からこゝろあつたのである。彼等のすべが
めく、**●** 母親を養ふをせんびみふむる。いろいろの
片書も撰つて嫁しもある。いざといふ時、自覚の
出来の安心の基礎を心つて納まうとみるの

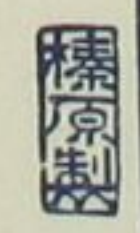


ある。動つた心、四民をスボイする金を得たよ
うな、**●** 地方が官守を傳つてゐるといふことが
出来た。

○ 一四合 湖波と云へば、**●** 四十年、**●** 南を扱し、**●** 日本
甲、**●** 北を扱し、**●** 上町の松波屋を合布し、**●** 湖波屋
の心を湖波屋、**●** 湖波屋の折柄を、**●** 可なり
人々を呼び、**●** とうとう湖波屋を、**●** 自今も、**●** 一
臨んじ、**●** 湖波屋の、**●** 自今も、**●** 一
多くの別名、**●** 自今も、**●** 一
と、**●** 湖波屋を、**●** 自今も、**●** 一
く、**●** 湖波屋の、**●** 自今も、**●** 一
い、**●** 湖波屋の、**●** 自今も、**●** 一

簿列して見ると物々目録しつゝのものがあつた。試案も目録の年々増え、改訂の關係する文書其他がどのほどあつたかと思つて其目録をよみて見ると同様のものもあつた。かくると三十位ある。他の材料の便覧も左に書きつゝ

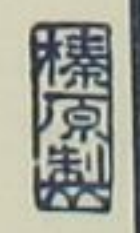
- 當選通紙書式書
- 當選状式書
- 得票統計表
- 衆議院議事席次圖
- 選庶日誌
- 改進黨入黨証
- 廣野臨時議會協賛日誌



- 小中村博士廣野臨時議會記
- 恩賜三組銀杯
- 恩賜百座下官名
- 廣野大本營紀念杯
- 議會紀念杯
- 失格鑑定書
- 選案法要書電文
- 當選祝電一束
- 大隈伯後援録
- 廣野臨時議會紀
- 危機一髪記
- 大隈侯國分前説奏紙

余が後援會長として
廣野臨時議會
危機一髪記
大隈侯國分前説奏紙
伊藤侯自書
復本

一 史道流流論 徳川公卿
初巻の四合建
 成并に并合古
 一 小野梓東洋雜著 稿本
此内：改題意の
 宜言の稿本
 一 高田訥多時代裁判中流教(通) 初巻の
 史道流流
 一 衆議院徴章 稿本
 一 非大因國統論 自撰稿本
 一 旗印唐書書簡 一卷 余の書道
 初巻
 一 函山内書書簡 一卷 政道之初
 一 官吏考生：改法を許すの書 院
 一 井上伯傑の改法を此とす 遠流自撰
 一 蹄塵録 大隈の三巻
 合解後巻中記
 史房宮内省
 奉仕中所得
 一 定法局印紀元一印御師銀三
 一 爪印伴記



一 小野梓田定流流論納許可書
 一 小野梓自著留書書目誌六冊
 一 鐵定齋夢法 示本題書中
 ○ 芝居その他 芝居行の歴史を述べたことなど、これに
 同しこと、来る所のものと、その時々の又らうある或りと
 芝居の例である。芝居の二字、祝ふ意味がある。祝
 祝ふ事柄の芝居、河豚の図を本に曰く、祝つ
 ることである。芝居の、この七アアんの原語である。
 関西は下手や不人気、の役者をダイコといふ。
 おる。ダイコは大根、といふ。吹らつて七降ら
 る(吹らる)といふ。とす。所、富貴か、富貴か、
 富貴か。

○田舎より多く原野のことか今もいろいろあるが女子のま不便も其一つ、便の楽な流しと陰毛を拭ふこととせぬ。女代りもカラダを振るゝ灰湯を敷ふことをやる。羊を三番も
とつゝ適切な言葉のあつたことを初めに述べへて一笑
し。或は角解に擬いしエを踏ちとそれよりよいかも
知れぬ。

○岩屋坂の狂歌、何れを雪のこずみも満ち
そとろ二階をゆく旅人の詞、簡ろしてよき雪
田の状の素をあらうし得る、田の思の悲に云く
お半の掃の田ろ、うのかんせいも昔あて
しとちこる麦畑、情状のゆゑ、田に男女を
し



の消息を描き得たのをもその又、げに酒、花を
らふ、帯として、えんことをけくち反法七日はく、酒
徒を思ふ、一と骨髄、素す。

○五ん、加賀の中代、夏、句の内、来てん心、森
ハ、森の思、あつた、句をよきとせ。強よ、金を鏝
かす、まじの、語を用ひ、まじ、炎威を思へ、砂、砂、
あり

○自分、十数年、門を出ぬ、杖を携ふ、愛
用の杖、一二あり、嘗て、字を刻せんと思ひ、未果
せず、誰んやら、杖を、破る、詩中、の、語、に

用行、吾、其、形、影、映、お、同
見ん、此、語、を、ま、た、い、ふ

○富貴の人を思ふ、貧困の人を賢い、吾輩左の語を至言とす

貧富致後子孫賢

○甚だしく漢魏の人多し、左の語を漢み果して其の感あり

救後英雄取故郷

○吾輩沈没あり漢の事を言ふ、尤も斯の如きの詩を他より難し、余の平生今も感あり二三の句を摘す

○曉星終落地、殘夢未離家

○度外穿歌聲、志出終境離

○古海見衰柳、前村帰暮禽



○重牛三尺短、老柳半身枯

○村氣解、霧燈光寺々楊

○斜日盡收千峰曉、乱雲初破一星危

○紅葉晚燒諸寺赤

○寺裏僧乞食、甘菜古佛豪華屋

○鶯啼無定柳、犬吠不知村

○夕陽白古驛、新緑擁孤村

○平田削徑窄、遠樹護村田

○秃柳獨鶴立、寒江殘月明

○山店空迎客、江村犬吠船

○鳥啼春後靜、僧語石樓空

○扶筇新橋水、伴伴無月村

○清風拂ぬ月の月拂清風
以上既ぬ冷趣あり又潤霖の興味あり俳句として
上乘なるもの

○あめし市井に海行し北くどき即ち多く心中に物
をえり入るを九段をいふ所し後みあるつと長きり
北くしものそと一程印釋するは多紙の北きあり
しかいづの片のあたるそと此よありし但しの流え
入りて七二雷の北のやみしあもるが性よりして對
行せんは余の北吹得たり十教行の北き
の刊行物中「鈴木主あ白紙一ツトセふし」の流
廿七年出版三人心中の流廿三年出版「北足と
都上戸の心中くどき」の流廿四年出版



故「花のあづま」新なる石橋橋心中くどき
流二十一年出版等さまざまあり中々珍らし
しきんの流二十二年四月発行の「東条春
城まうどうくどき」上下二冊があることへ
注意法易なるもの北有禮が西の文を
二刺せんたることをくどきつ節に仕組め
るしものそと木林と森林しと文をりと文二と変
名しあんとす、すんで南の事実を捨ることな
くあらしい、表紙の一書生出及を以て洋
装の大書を刺すの圖を刻しあり内容
七四の忠節を褒めたりてあり、内容
よくもつた出版を許し北よのそと不審なる

〇一程子言が表紙の八の字の法二十二年四月
神宗とありて改元の名を記しあり後年
出づる言の事ありてことか知らざる
の故二十七年前の千うボラ〇此程の刊本
いんじと云く。目今の時比より多く
三下目吉田考言の書に比しある。二月二十
九日記

〇古人の書を讀み往々至言と感ずるものあり其の至
言を耽味するは皆其考言の言を所教之言のあり
ありて凡々の語を以て云へ人至言と云ふこと
この之れを文の至言と感ず文章の蔑視
了可なる所以歎左に千帳と云ふ四五を採す

- 〇輕信驛友、聽言之大戒也
- 〇氣忌盛、心思滿、才忌兩路
- 〇德利轉于取利、此名巧於邀名
- 〇坐密室如通衢、取寸心如六馬、可以免思
- 〇戒自不妄語始
- 〇逸覺退便是近、逸覺病便是急
- 〇事來莫放、事去莫追、市多莫怕
- 〇終下手便想到究竟處
- 〇見前面之千里、不若見北背後之一寸
- 〇剖明世之碍也、剖而曉、明而臨、免初也、夫
- 〇味無味、安求其樂、才不才、問西面北身

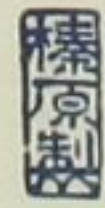
○有錢千里通、無錢隔壁鄰

○耳聞不似心聞好

○以不主異為高

○成親四為無過吏、保全家是四清門

○山中笑(共古)此頃の好書家として知られ、お南考証の能く、荒千の著書あり、皆考証に関す、此年歿して遺書を看る、余共古と交、様々も得たり、七丈の遺書一冊余の千、後、女書署して讀書録具とし、万枚許の半紙本、共古が目録の近年の圖書のカタログの打出しを拓し、其の也、其教或るを極め、冬、そのき共古自筆の



書名著者を採ず、巻首に三村竹治の狂歌あり
色字に撫子

をともむ柳子とてきこ

よむをの表紙してきこ

をともむわうけ

大正八年に未六月三〇

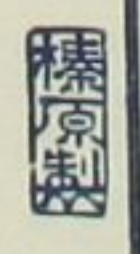
竹治印

共古の遺書

此書の成り、此題名の如し、次、共古の好書の一端を記し、世に拓を採り、ありと云、此南洋の遺書、表紙を拓する、その恐らく其人

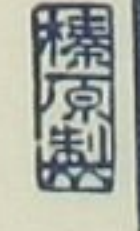
のふよきつゝなげし 此書中^{（一）}の書目圖書ハ十中八九
紙印のものあり 早大出版部 是は其の七の七四五枚
のあり 現在紙を感ぜざるも 紙しず味ハ亦格おの
りありし一柱の執あり 津^{（二）}を蘇^{（三）}志^{（四）}の如き
好子の書ハ自家讀書の紀念とすすべく 各
著者の言匠の一端を空現ありとす 亦一時代
風尚の一斑をも知るを得べし 余好^{（五）}書^{（六）}に紙を自
から信す敢て人に譲らざると 只此後彼の圖書の
表紙を扱することハ氣附おせしむ 一月廿九
日記

○交通の開けと世帯の花田が指ししとくこと 何れ故
七回際化してくも 恐らくも 危殆思慮が紙を未



するも古史の一例であるが 今おるも七回一傾向が
つと追々日本の紙を治つてあるハ 捲かへからせよ
実である。此際も或る席上ハ 此の道^{（一）}の道^{（二）}と
いろく流をいれ流る。 皇^{（三）}府^{（四）}の如き 亦^{（五）}支^{（六）}那^{（七）}の豆
豆七^{（八）}のくろくろくも 亦^{（九）}の何^{（十）}の如き 亦^{（十一）}支^{（十二）}那^{（十三）}の豆
が原料として用ひしとす 亦^{（十四）}の如き 亦^{（十五）}の如き
類をいひも 亦^{（十六）}の如き 亦^{（十七）}の如き 亦^{（十八）}の如き
入^{（十九）}の如き 亦^{（二十）}の如き 亦^{（二十一）}の如き 亦^{（二十二）}の如き
類目も亦^{（二十三）}の如き 亦^{（二十四）}の如き 亦^{（二十五）}の如き
七外四^{（二十六）}の如き 亦^{（二十七）}の如き 亦^{（二十八）}の如き 亦^{（二十九）}の如き
外産に産例せんまがくろくろくも 亦^{（三十）}の如き 亦^{（三十一）}の如き
を歎するのみハ 亦^{（三十二）}の如き 亦^{（三十三）}の如き 亦^{（三十四）}の如き

のほ内道造の妻が根津の惣家から道造方へ輿入
 んをやつた中時の事と云ふ。今何人か知らざるも自
 分とも云はれし夢のことと云ふ。源本町の北の町
 へ傍をよると此道造を尋ね訪ねて自分へ前掛を
 切り下けし夫人を元記膝の膝へあてあすか。その他
 何も知らぬ。道造を庇護しおれ永平寺詣り(正
 の父)が此世の義親と云ふを嫁しにせむあるが(正
 式に結婚の披露をせし譯りせらる。志介亦當
 が儀より義親と云ふはと云ふ。輿入の時をハ
 粗略も無つた。女らうと想像をせし。此の七も南の
 事かあるは。昨夜偶々妻の語るをきく。此
 事道造の室の(ゆき)妻の親戚の事と云ふ。



果してよのが位と云ふ。目然嫁がいつこからかく
 といふやうなことが知れぬ。おれと云くむのむきえを
 せると。その夜雨の降りし。一廿日人力車
 柳金舟を股にかいた人。此女がわつて来れ。是れ即
 ち夫人の輿入の頭髪。柳甚うして草を後と云
 いてのれと云ふ。此女馳走の有様である。亦南の義
 親と云ふは。自分もそのことと云ふ。死なせら
 る。自分が死なば。主筆として新居を築く。此の
 道造が此女を納む時をいふ。思ふが。馬山重
 吉が死なば。やうてきて自分の家へあした。其時の
 道造が此のことが。馬山云々の事と云ふ。終つて
 子か。是れ云ふこと。今記膝の事か。妻の終る

所ニ極々との正山の氣集つきし、其相てしある為め、前
後を切り下けて、被布を着せしことありしと云ふ
の事ある。めづるは被布を着せしおれことある。正
山の氣のつきしハゲト粹るさつやうもあるが、妻
の記憶ハ正山の注意比と云ふことである。正山の正
と親近の關係があるは、或ハ亦ある。其のつきを
いかにいふとも知らぬ。安んずることありしは、
つけおく

一月三十日

○耶馬溪の洞門が裏海といふ所、頭もつて穴穿たれ
此の傍ハ七と彌波高の世侍を人を殺し比為め、
電し流滅しと洞門開敷を公たれ、その工事の終
くまの内に、前年殺害し人の遺子が復讐の為め、
つげおく



傳を尋ねたが、傳ハ洞敷を執心せし、其の
成就ハ命ハ勿論差出すといふ事、其の感し復
讐を思ひ止まらうといふ一所の物語ハ大内忠実
又依り委しくあることである。自分ハ當りて耶馬
溪に赴くは、此法ハを安んず、洞敷ハ我仰也
關係ある故を以て、今次出づるは、隨事ハ
のれいと云ひ、折角福を起し比が、教敷の物語ハ
有ることありし。此ハ其の証ハ、親ハ誤り比説
か古川古松軒ハ、
知つた古松軒ハ大宛の家ハ、耶馬溪を訪れ
の、福徳ハ、一七三三年の後比と云ふ外ハ、古
松軒の説ハ、往々として傳せらる、神ハある、其

説「百人の七しはの洞窟」といふ事に出てる。又
又據ると洞つを造つた人「江戶浅草の善海」といふ
田圃坊主が喰ひのめを耶西流り来り「羅漢寺」
へ入り込み此洞つを造らせた。洞道「東の切
板約百二十間ばかり、西の方二三間、所々以時々
取つた穴あり、善海、大山河の龍窟坊主とて
四十と年七此地に住して八十八歳の長壽を以て死
し此、此洞道、勸化をして金を集め成子の後「人二
以三文、西一銀」といふ文宛の通行帳を両つて金打こゝ
つ比加毫七仁むろろ、高利貸をやり、赤坊「其善
殿を村の富者おかしむ依頼して死し此、後何れの時
へやら只人のそろ、うつては此とある。古杉



の道徳寺、来此の「善海」は後十三、四年後かあるとい
と、大由吉来りの「福海」物語といふ大分村史にある。自
今か地の地帯「福海」の事を「龍」の跡を「龍窟」といふ。此
の異説「言列」を「善海」の事か、こゝの「海」は
く、
○「福海」論「善海」の七流の傍に「龍窟」といふ事、其の
事、直「善海」の事、詩「此地龍窟」といふ事、其の
流の事也

龍窟論「善海」の事、唯「西文」も「道徳」
「四流」も「善海」の事、果「善海」の事、
何時

○松林飯山名を漸といふ大村満の人と少壯と文
才を以てて少の由、同志に勤王の人多し、嘗て玉葉
門廣瀬林外とて、京都に家塾を一つあり、徒に教
授す、其の勤王の書を築りて、海をこし、梶本心隆
は、同藩同志の人、飯山不幸、満の依論堂の爲
めに刺せり、一時其の友二年、享年僅う二、三、六
維新を見ずして歿す、弟、義之、少くも之の歿
後遺稿を出改す、飯山文存二冊即ちこれ也、飯
山の文、筆目を校く、常時志士の文と因りて、後す
可なり、山陽の時を同くし、内恐く、函稱措かせし
ごとのある、余此人の文を好む、又此人の書を得
んとす、ここに久矣、書簡曰、其集を力の爲す時



七、終に一紙を得、終つて、此に才歿せり、其
家より、若干の書を得、世に出づ、余前、始めて、其
千言の本一冊、昔、獨一を、を得、公、前、其、依、
新、次、中、と、思、ふ、す、有、る、前、志、文、行、を、齋、ら、し
来、り、よ、り、あ、り、金、蘭、湯、序、兼、續、近、古
史、迄、序、二、の、篇、を、収、め、也、何、如、其、中、の、評
あり、樹、外、の、細、書、の、お、り、統、評、を、別、爲、り、也、
し、各、文、の、終、り、に、然、す、飯、山、歿、後、其、才、何、如、
に、痛、し、う、も、也、飯、山、文、存、も、此、二、文、を、収、め、
也、何、如、其、中、の、評、あり、此、文、行、の、即、ち、其、原、を、
也、飯、山、の、楷、書、若、正、文、の、書、と、此、に、賞、ま、し、し、金
蘭、湯、序、の、歿、す、る、前、年、心、す、所、り、也、同、志、の、人

を長い学を衰し、み憫之人を勤かすよあふ
 而して、彼山自身心終つて、命を殉死に
 火、友人を哀し、あゝ、実の自から哀し、也、序
 中云く、

余今春病臥、得十載、故人多白骨、一生知
 已、獨青山一聯、所得故人、如河崎士毅、秉
 正而死、如高橋有孝、病瘵而死、如松本士
 権、田中湧助、奉義不成而死、如清川士貞、
 本間至誠、家里、洗縣、亦皆罹禍而死、
 其他存者、久不相見、每一念至此、拊心嘔
 血、不欲久存、哀痛殆遍、於骨肉、於故
 曰、言天下之至哀、亦莫朋友若焉、云

照參

日本市ノ司教ノ手傳
 皇極天皇御教
 出シテヤクシヨセテ
 准

御主降生以來 千八百七十八年九月
 オラシヨ 並ニ ナシ

ORASIYO
 NABARINI
 WOSIHE.

御主降生以來 千八百七十八年九月
 オラシヨ 並ニ ナシ

日本市ノ司教ノ手傳
 皇極天皇御教
 出シテヤクシヨセテ
 准

則規きぞのがと
 【照參號六八四 頁三二】

<p>校五 再刊 小の規則</p>	
---	--

へシヲニ並ヨシヲオ
 【照參號七八四 頁三二】

此書近着大坂書肆杉本家の古本の内より白紙摺
帳の七冊の八十五冊とあるがのどき規則が西
千六百年の是も時代と日本に刊行せんやる原を
禁者令にても日本に傳へ、僅少の羅馬の文庫に
本の在するとの此二年日本主敵へんハントが禱の
朱のしるしあり乃ち此書あり、大ラシヨ並にラシへの
一書ハ洋装二冊三十五冊と西曆千八百七十八年
の次十一年長崎の刊行せんやるとの
馬字をと假名平とありといふハ稀記の書也
○かつ衆議院議事録を共々に叔政及二君行幹
の傳記を編纂家と貴子益三といふが傳記
未だ益三早稲田大寺の出身である。上巻は弘前

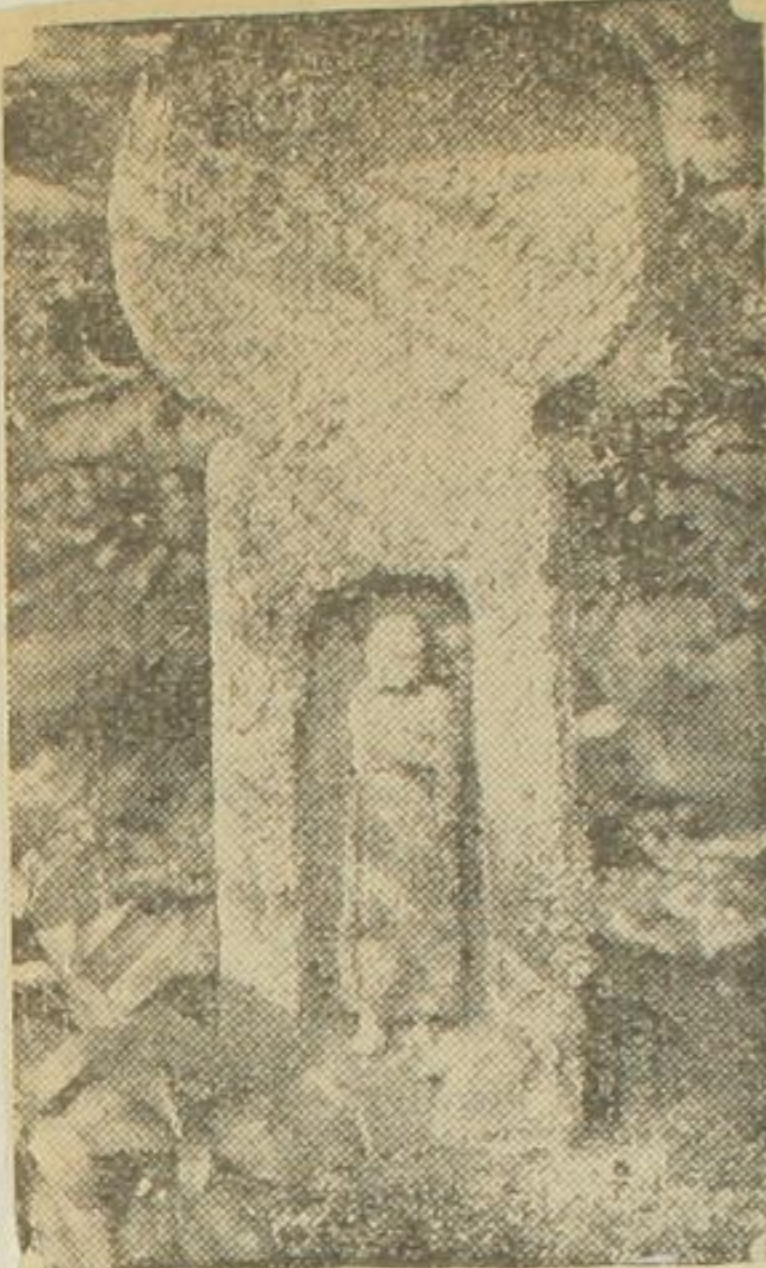
長崎

の人の確ら初動の誠念ある進んで終始誠意を
占め此人があつた。彼しから此廿数年をたると
今頃傳記の編纂家といふの如くはおそい。あつた
つ下は弘田指しや一戸大徳を分る。今やも
待す傳記任の出来とありとあり。今やも
幹その人の就むの自分の印象、如くも七君
實の人の國士の面目があつた。其の當時の誠意
の長談説が行ひん此人の漢説も教るやか
此四の事、取ん、堅きも動議を起すこと
ありあつたが、堅きも、キウと云ふの、二君
ニキウの、アガ名があつた。此人の就む傳記の

切支丹の遺跡

寛政以後の潜伏教徒の墓碑と

眞人畫・聖者の油繪



【大阪發】徳川三百年の長い間きびしい難境の下に、潜伏教徒として磨かれてきたキリスト教徒の魂は、たゞしい。

殉情の名残りは長崎あたりを中心に各地で見られる所であるが、今度また瀬州地方から寛政後のはゆるる「潜伏キリシタン」の遺物が三發見された。静岡縣小笠原郡原村の古刹彌生寺には眞人畫の掛軸と、境内に寺の人達から「ヤッ! 地蔵」と傳説的に唱へられてゐる古風な一基の石燈籠がある。

最近、徳川大阪の美術史家西村貞氏の鑑定によりはからずもこれはキリシタンの墓碑であり、しかも従来は墓碑の存在を疑問とされてゐた「潜伏キリシタン」のそれであることが認められた。

興味湧く

由來談

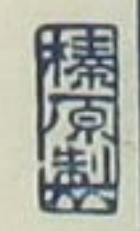
油繪の地は絹

【濱松發】静岡縣小笠原郡原村字山崎彌生寺所藏の眞人畫の掛軸と「潜伏キリシタン」の墓碑について同寺住職泉敬勝師は語る。西村さんは西尾藩士で、天文學者の高森鐵好(この人は日本における油繪の始祖)の描いた油繪が小笠原郡原村の三熊神社にあるといふことを聞いて訪ねて来た際立寄られて發見されたもので、眞人畫の油繪は絹地で長さ三尺四寸五分、幅八寸の掛軸となつて居り、この掛軸については別に寺に關係書類が残つてゐない。「潜伏キリシタン」の墓碑については同寺では利休燈籠といひ傳へてゐる、それは横須賀城主渡瀬左衛門が大阪城の秀次に加擔したので寛永年代に城を沒收され斷罪になつた時左

衛門は豊太閤から拜領した利休秘藏の茶の湯道具をこつそり同寺に寄贈した、その際これ(墓碑)一緒に届けられたところから名が出たのですが、一説には利休の茶室前で白鳩が死んだ形身に三つの碑を造りその一つが同寺に傳はつたともいはれる。もと寺の裏手の墓地にあつたのを四十年前庭に移したので、墓碑は花崗岩で長さ三尺刻まれたキリスト像は一尺で長い布を纏つた形に刻まれ石の上部は丸い形になつてゐる。

材料とするもの、ものを打ねぬ、徳川の首領、老字を心することも流した。三ノ肝、腰、飲者、一誠、報、國、と、較、行の本能寺の句、佛上人(大谷光遠)の怖れ、も、流る、の、人、と、う、ろ、と、月、原、し、生、活、を、助、け、ぬ、う、ろ、の、境、遇、と、う、ろ、の、例、書、や、佛、書、を、二、十、五、回、七、書、わ、く、と、い、ふ、原、も、か、あ、る、書、畫、雜、傳、に、出、た、自、分、の、先、漢、と、い、つ、あ、り、の、交、り、も、あ、る、寺、の、祖、先、か、ら、縁、故、が、あ、る、先、漢、の、書、画、を、其、の、因、縁、か、ら、も、何、れ、家、日、在、の、べき、に、か、し、年、例、向、を、古、い、に、移、冊、を、購、ひ、得、れ、お、り、何、れ、ま、い、の、昔、し、法、主、の、親、書、を、祈、り、お、り、成、る、式、千、の、金、を、献、し、う、け、ん、い、ろ、う、ろ、の、比、ま、り、今、の、下、に、其、の、酸、の、果、が、あ、る、白、子、の、比、身、を、支、き、し、是、の、報、

書を書いて貰うたいといふから、自分も讀んで揮毫
を托すことゝす。上人の生計を助くる宿縁があるか
ら、後寺の佛の観音の教を拂はんとせらるゝ
係し上人の書に決して拙むらるゝ。善通の畫家又
書かせるゝり体を得るゝおもしろい。二月一日記
○休多芳久といふ医家が著すといふ「肥涇血の
縁汚と治癒」の書と認めんとぬる。其の著
述の筆意白石ハ、自分と交りかゝるゝ。未だの抄
一紙せると贈つたが、自分ハ謝して一頁も讀まず。納
戸の書架へ片つけては舞つた。實ハ自分のやうな
好書酒家ハ老年輩のこのハ、之んを讀むハ、自
らぬも知んぬ。○自分ハ、此書を字のせれり。自



分の性癖を知つての好書からせらるゝとも思ふが
赤銅とて、皮肉の野うまんとおもはん。是ハ、感
情を定まらば譯むらるゝの實地の方を讀むこと
恐ろしくおもしろい。此書ハ、後人ハ、自分ハ、
日常生活ハ、脚筋を生じ、怯弱や臆氣ハ、酒を
飲まずとも、おもしろい。酒をうまると飲又得るゝ
やうなるゝおもしろい。○自分の恐るゝのハ、此ハ、在つ
て何んの書物ハ、滋養の癖ハ、あるゝやう。此書ハ
けいねいハ、此書ハ、書架へ束ねた。
○自分の此書讀むつとめせやうなるゝのハ、故味懸
かると、玩具や玩具や、いふハ、自分を遊んで、
散策の抄も、おもしろい。手出しをす。い

つもる時より夫人が子供を喜ぶことばかりを思ひ
起すつくく考へると自分の夫後の日常生活
の半分はねがてに苦しくしてゐる。おやうなよ
毎口兼務する地位に實を云へばねがてのせう
まゝの如く少年例も一年一回隨筆を出
するものか為の海の時百を費して一月も
かかればねがてに暇を度々するにせよ
世を憂ふる為のたまひ。各所からねがてに
求めしものがある。無聊も考ふるに
方便が敢て許さず。どしく書いしやが
ねがてにある。新書や雑誌も
まゝの如く表の通りを許さず。い
まの如く

福永

ねがてにある。漢語のねがてを
とらりするものねがては
る今より出度と許さず。い
まの如く。國書や書畫と過つ
ねがてにある。家を出て家
のち又ねがてに居る。いと
三味線を弾く子かあり。空
する鬼かあり。ピアノを
も属する。こんどは列を
の家をやさむ。極めを
あるかの如くである。志
まそめり人に許さず。こん
まそめり人に許さず。こん

ついで文部省が「新編」を刊行し、御体振から傳へるものがあるが、大體「新編」と人間の為すことの本質は「新編」である。先後拉致的の生活の出来の事柄が仕合と云へ得やう。國家の老の社会の爲す、いふに却る妨と云ふ事もある。比すると此等が氣を先後の生活にこそ深かきといつて得やう。

○五、軍山、家老の古の稿、全部を愛知七後、亦并に圖書を多くある。意ある。書に傳へる念心の書を撰ぶ、傳書の條、親友の細説を、唯此一親を奉ぐ、未だある圖書の古の書に列す、圖書を自身又とす、七、傳へる、花者、伝へる、重んずる、きよき、若雨の自筆に成る、この六回、いふ重んずる、いふあり、何れも、親の七、歴



史あり、其の歴史の圖書を重んずる、ある、茶屋の歴史、三、由り重んずる、爲す、一般に、是れ文章の、花、未だ、古の、既と考へ、然るも、未だの、考へる、難、但、此、金澤、文章、本、幾、傳、絶、對、得、可、知、蓋、上、杉、氏、山、奇、進、の、未、歴、ある、故、也、傳、三、要、の、中、心、を、経、緯、の、復、原、を、取、る、故、也、中、に、就、武、田、信、玄、の、花、印、を、傳、三、要、互、接、傳、云、の、傳、を、考、へ、る、未、歴、を、考、へ、る、也、此、此、歴史、は、此、文章、の、圖書、の、考、へ、る、事、也、上、杉、氏、の、奇、進、の、親、友、時、代、の、武、田、信、玄、の、事、也、武、田、氏、亦、武、田、一、遍、の、人、の、考、へ、る、事、也、三、要、傳、の、身、と、し、て、家、原、の、陣、中、左、右、侍、し、て、六、韜、三、略、を、傳、中、に、傳、へ、る、事、也、亦、亦、文章、中、に、存、在、し、上、杉、武、田

諸特名師の三書の款談の存するを殊とするは當るは
の手抄を注せし眼を得ざるは故也。其の是眼
[海]を徒集の外に於けるをせしを生
又其の想像の想像を重ぬんは無量之感あるを
得ざる。抑り歴史の存するの重きを所以に茲に存する
其の未歴の極り重きを為すを見し愚と笑ふ所のあ
れども、雷波の徒論するを遠くして、余ハ斯の
如き見地を以てして、未歴ある固者を猶も、吹可
南軒集一部の六冊の原本を漸く得ざる也。其の一
例に、此集は黄仲則の集の詩集たるを仲則の詩を
以て乾隆中とある。嗚呼、此集は決
て稀釈のものあり。唯此余が是眼を烟に附

し去る詠ハキ... 後田ハ花ありて来歴の富
あが故耳。此方各巻に、此は空高の笑題なり。聽
劍の詩の為りてある。聽劍ハ空高の一人にして初稿
舟と稱し後部を舟師と云ふ。聽劍ハ空高の一人にして初稿
の白、空高の詩ありて、

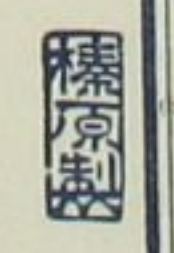
聽劍花父執業秋村先生朱批而南軒有
鈔不耐投瘡則購此方於滬上以換之云

辛卯七月

空高南文藻

とあり、この他、空高の秋高手入本を以てし上海
ら此を得て、交換ししものと知る。乃ち此の
誤謬に依り此書以外に他に一本あることを知り得べし
空高の花書一切漏るる早稲の文庫に在り

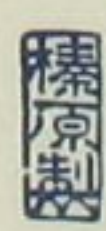
リ世々々技藝を承見するを得ん、寧ろ高の聴劍
所長本とこんと換つて、いさゝか此を必うするの
るゝか、各巻各詩の評點を下し、各頁朱圈を以
つて滿つ、而して七月日寧ろ高誤つとあり、而して七月
中ニ國然とかくるゝ誤り、其精力にあらうとへ
し、寧ろ高聴劍、政後此者珠珀、冥店、現、
栲川、唐陽の年々入る、卷首、白文の、次、
リ、その、栲川、唐陽、寧ろ高聴劍と交、あり、文字
の因縁を、吾人の之んを、の、
らうと評、あり、
るゝと評、あり、
て、お、
へし、お、



朱歴、秋、寧ろ高聴劍、唐陽の、
と、
教、
歴、
○、
又、
目、
三、
術、
七、
那、
考、

五の巻末 吳祥瑞地味器の圖七多く叔のありて
二時のも架中より
二月一日誌

○前年 余が多く古簡を蒐集し折書簡
の類の味その他をいふくむきなること
ありしが其處に集つかせりしは 芭蕉の
為友故の正のあることと云ふんぬの貴
簡三つをもとをぬりし。句もわかしき
第の貴心を取らるる役主なるに相
りし。此の書簡のありの門人美濃の陽花
唐梅石の字のせりしものも 梅石の其の教
を惜んじ書状の到来毎に唐の天井の焼
り仰る日夕之人と堂院しなるも 梅石の
と



んとして致し了故に 其末才仙秀の大海の千二
物し 大海の天井の焼りつめたる及故をぬりし
善におろしり 晩年 大海 (芭蕉の) 廿二
日焼る字を 大鏡 所あり 廿二
善ふよ多し 一人の之を私せんし 多くの
人に於る其の多し 善外す じらする 一簡を
残し 他も多し 各方面の人を 述べて
述し 其の多し 親をいす 古簡の文と折書簡の
句をぬりし 多し 行くと先をも注し
り 此の一冊の者ハ乃ち 天の三年 江戸の
中 破折して 綴りしものを 一紙して 日暮る

雲寺の後山に瘞め碑を建て、其の事由を刻
其の碑と菅菫翁及故塚といふこと此書の中
に詳記せり。師の書簡はあつた心老といひ
利九といふて可なり。余の書簡保存の勸め
といふを遺著の書きたるが、此の遺著といふ
例といふ漢字可なりといふことか例也
漢字も古今終に心附かやうし、其の
菅菫翁の書簡の今に傳つたもの少からず、其の
書簡を集めて上木したるものも無きやある
一人の字を尋ね書簡の三つある及ぶといふ、恐ら
くそのものもあつたし、但し梅石の字のせつた
比る程は、二二三行乃至四五行の、よき多く

東京

まゝに田圃を耕すもむらして、今の端者の文の如き
よき、大竟おの梅石の庇護の下に朝夕を度
梅石の家が、〇〇〇〇〇〇ありし故、以上代り、業
に托し、そのことを知らる。其人、其の書簡の世に傳
はる長崎の日を、比へ、其の書簡の世に傳
常生活、却つて此等の書簡の傳り、素保に現は
るること、破ることも、おの仇生活を、〇〇〇〇〇〇
とす、すことを得ん。多く、おの梅石、〇〇〇〇〇〇
ん、物と謝する、礼状を、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
贈し、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
たりして、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
おのやう、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

一紙はわりとこしこしかたけりけり
といふ如きは風味なりふりまゝおろし
紙より米麦味噌醤油酒さきまじり
流しを困る大工をこしこしこし
う猫をかしてとくん視を人こ
こを煮つる、剃刀一握りのあ
菊も出来也一枚もはひし
酒の物一握りこしこし
大き、井田尺五寸七厘
一枚はしこしりの蕎麦の味
み入る人、土産をきりから
味をかき出さうささいから
味をかき出さうささいから



或は四葉を焼いと頼み、
頼みは、今割殊のお菓子を
子のの儀、中頼みと
とからひひいかに
信使を、或は葉を
ひ、不うき、折ん
半切紙のうひさ
し、井のつり桶く
つとり、ド入る
を好まうと、
ハ一も、かすの、

以上の苦菜ののち中流の杖を杖方集せんといふ物
つぎつぎと卒けて元々だが、後の千紙の朝白の
處よりうらを執りて未親をよみたり。其角の刊
着を報しむ其角の消息をある一しとある
二なるもある。句のゆる方を副海に教くは千紙
七あり。程々の物へ問ふはきりある。月見や牡丹
見え透ふは又もあり。千紙の端より句の程はあま
少からず。此の句のみをきき送りたるも多し。若未
九心地の友故集に直におく徳のこころを親があつて
も例の句集にはせん。切つて二五の趣味を感する
は夜半後熟語とて又の一編を志す。二日
二日稿

標高

○元は元行校あり。地より自動車あり。直に快通世界
である。あるす。もう自動車が早い。ある。疾。せ。と
は早く下を行へんとす。所々達す。騎席の勢をい
ふある。行ハ財の好くして事。成。ふ。美し。使伴の
快通。と。駆。り。て。す。と。決。る。よ。の。成。美。し。ヤ。カ。ら。か。り。て。る。也
快通世界の。の。の。沈。思。を。要。す。思。察。ハ。毎。日。つ。東。に
の。可。し。知。今。や。産。兒。ハ。呱。々の。聲。を。揚。ぐ。と。共。に。自。動。車
を。以。て。家。に。運。ハ。ん。死。休。ハ。呼。吸。を。絶。つ。と。自。動。車
と。以。て。葬。場。に。送。ら。る。兒。カ。ヤ。し。く。思。あ。つ。て。出。よ。病
者。も。死。期。を。急。く。莫。ん。快。通。世。界。殊。に。沈。重。を。要。す
也

○以来。プロレタリヤの権威注目と仮する書体。ハ。プロ

レタリヤの考りよりの事を書一籍目につくやも陳列
せんであるのを見れば。プロレタリヤは冷面展覧会
此品を陰をこきりしめしめ得るべきを念に賣つ
出さる。築地不割館へもプロレタリヤ劇あり。戦後
と名くるプロレタリヤの考りよりの雑誌もあ
り。プロレタリヤ音楽の工風を有しつゝあるもの
あり。プロレタリヤの左祖する絵画家もあり
雑誌記者もあり。若者連家もあり。能優もあ
る。此れを考り盛んするものあり。此れを考り
ざと書を幾んど日も得るものあり。新橋を遊歩
し。プロレタリヤ本や絵をこきりと得るものあり
物つれ。それら毒毛の偏見を非とするものあり。

櫻京製

プロレタリヤは因物なきものあり。彼等の主張
往々耳を傾くべきものあり。租税の大本はブルジョ
ア階級に當ることを見ても亦之れを非と見
常として租税の中産階級の負担を重しと見
之れを軽減するものあり。中産階級の負担を
人々の能力を、その日暮りの悲況に陥り、終つて
毎々重なる。左祖するもの見ても得るものあり。人
を、是れ大なる庇護を受けるものあり。大なる租税を
拂ふを重しと見。何故に優遇を重しと見。税を
更らぬ。重くし中産階級以下の租税を減
する。大なるブルジョア階級の各階級の
態を重し。如斯く政府の最も恐るべき所謂危険

分子を多くする所以と切をや

二月三日記

○横山大観妻を伴ふ外回日赴く大倉里為り十
萬の金も非ず大観の此行腰に十萬金を纏ふ
彼人の豪快知るべし彼人の一行は、特許漢河三人あり
別る室の押さるる直るは世に克んとす、吾人の此の家
の豪氣と云ふは、世界を大観と云ふ、染みの服更ら
ル一ぬの索、探加ふことありん

同上記



解散された政治結社

— 明治より現在まで —

洋自由黨 明治十五年五月二十五日、榎井藤吉、赤松泰助氏等によつて、九州島原の江東寺で結黨された。綱領は、「我黨は平等を主張す」「我黨は社會公衆の最大福利を目的とす」とある。が、同年七月七日結社の禁止を命ぜられた。

車界黨 明治十六年自由黨の志士で、後に大逆事件に連座した奥宮健之氏が、東京で人力車夫の一團を率ゐて、馬車鐵道反對同盟を組織し、のち車界黨として急進的智識分子と共に活躍したが、同年解散された。

社會民主黨 明治三十四年五月二十四日、「社會主義研究會」「社會協議會」「社會主義協會」等々の分子と、自由黨の左翼、幸徳秋水(傳次郎)、キリスト教的社會主義者の安部磯雄、片山潜、木下尚江、西川光二郎、河上清等々の諸氏によつて組織されたが、現行治安警察法によつて、同日直ちに禁止された。

社會平民黨 同年六月三日、前記社會民主黨の諸氏によつて、再び結黨が企てられたが、また即日禁止された。

日本社會黨 明治三十九年一月二十九日、西川光二郎、樋口傳、堺利彦、深尾詔、片山潜、山口義三によつて組織され、二十二日結社を禁止された。

平民協會 明治四十年十二月二十二日結社、同廿七日禁止、片山潜。**社會黨** 明治四十四年十月二十五日結社、同廿七日禁止、片山潜。**獨立勞動黨** 明治四十四年十一月七日結社、同九日禁止寺内幸太郎

日本勞動黨 大正三年五月二十五日結社、同六月十五日禁止、福田狂二。**日本平民黨** 大正三年六月二十日結社、同七月三日禁止、福田狂二。**日本社會主義同盟** 大正九年十二月十日、大杉榮、山川均、堺利彦、岩佐作太郎、大庭河公、荒畑勝三、加藤一夫、高島之、麻生久、赤松克麿、加藤勘一、高津正道、その他、友愛會、正進會、交通労働、曉民會等々の團體を網羅して組織したが、翌十年五月第二回大會後解散を命ぜられた。

農民勞動黨 大正十四年十二月一日、結黨式をあぐるに至るまでの内部的の経路等を照し合せた結果治安に妨害ありし理由で、結黨後三時間禁止された。

労働農民黨 労働組合評議會、無産青年同盟、例の昭和一年三、一五事件のち同四月十日解散された。は餘りによく知られてゐる所だ。その他本年の黨準備會禁止等。

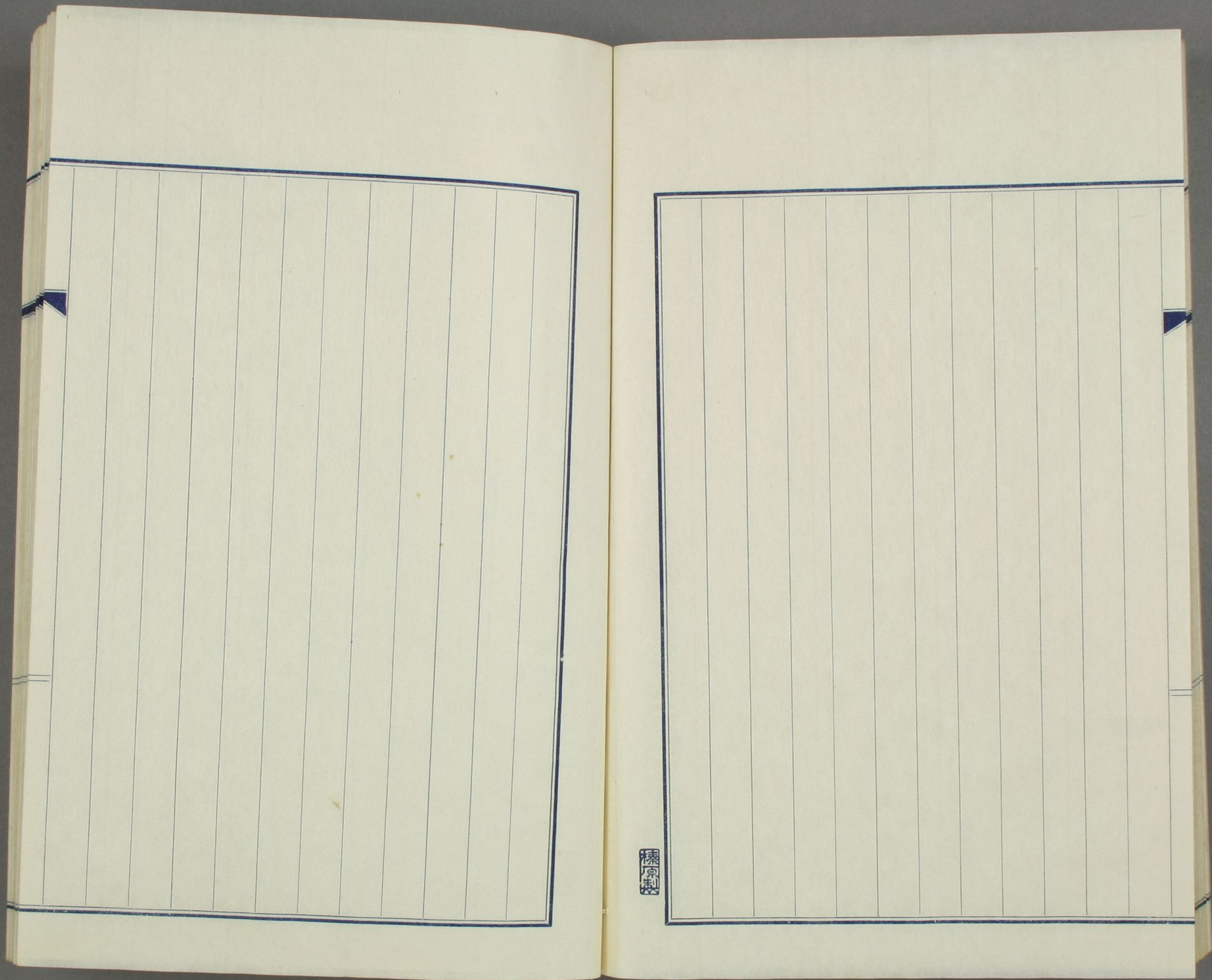
同 四 年	同 三 年	同 二 年	昭 和 元 年
十六億八千二百萬圓	十八億一千四百萬圓	十七億六千五百萬圓	十五億七千八百萬圓
二 十	二 十一	二 十一	十 九
廿七圓	廿九圓	廿八圓	廿六圓
	十七億三千二百萬圓	十六億四百萬圓	十六億一千八百萬圓
	三十五倍	三十四倍	三十七倍
	二八圓	廿六圓	廿八圓

(實行豫算) (現 計)

緊縮後	歐 洲 大 戰	緊縮後	日 露 争 争	緊縮後	日 清 争 争	明 治
十 四	十	大 正 五 二	四 卅 卅	卅 一	三 廿 廿	廿 四
十五億二千四百萬圓	十六億二千五百萬圓	五 億 圓 毫	六 四 二 億 八 千 萬 圓	三 十 九 億 八 千 萬 圓	二 億 七 千 萬 圓	八 千 四 百 萬 圓
十八倍	二十倍	六 倍	七 倍	三 倍 三 分	二 倍 七 分	一 割 一 分
廿五圓	廿七圓	十二圓	二 億 一 千 萬 圓	九 千 九 百 萬 圓	五 千 八 百 萬 圓	二 千 四 百 萬 圓
十四億二千九百萬圓	十三億二千七百萬圓	二 億 七 千 萬 圓	二 億 一 千 萬 圓	九 千 九 百 萬 圓	七 千 八 百 萬 圓	五 千 四 百 萬 圓
三十二倍	三十倍	六 倍	五 倍	三 倍	二 倍 一 分	一 倍 三 分
二五圓	廿三圓	廿七圓	八 圓 半	六 圓 半	四 圓	一 圓

財政の膨脹比較表

國庫歳出 人當り一 地方歳出 當り一



紅印

○福池梅痴の白草脚を不^らつ^く 雪の集のつ^らあ
の^らく^ら七^冊兼^中 雪を二冊と^ら比^一横と^ら
情^と 潤^本忠^義義^卷の^内四^下九^枚を^ら最^後
の^一枚^をその^注又^書を^附す^他の^一部^をも^らる^る
る^るか^もあ^る不^比才^の割^中 澄^妙及^志高^浦和
布^刈に^刀白^信子^の坊^をし^こん^る 罪^流五^枚を^ら現
め^らる^る也^外に^梅痴^自言^の平^曲一^冊を^ら
亦^也跡^をま^すし^し 標^紙を^ら奉^信平^曲(^活語)^實
盛^意意^動と^らる^る 亦^おま^じ七^枚の^長士^自か^ら後
り^らる^る世^をの^らと^受き^まる^る 亦^おま^じ梅^痴の^自
言^の平^曲を^らの^らる^る也^尚此^に梅
山の^粉本^一冊^を贈^ふ 法^馬南^の花^合を^ら言^一に



○この^らを^ら標^紙を^ら梅^痴の^題字^款記^をあ^らす^梅山
此^に私^藏し^るか^筆改^方に^似る^るあ^らす^七枚^の
高^し各^帳雪^山鐘^のの^らす^梅痴^の書^にあ^らす^二冊^男記^{あり}
修^補を^要す^る
○誰^んやら^が蹴^まう^を書^した^らん。仙^厓が^漢と
や^つて^おる^思の^字を^大き^くか^きま^り下^えけ^ん
て^も踏^んで^もと^ある^好書^也
○吾^輩は^おの^らの^習癖^があ^らる^自か^らも^笑つ^てお
る^もえ^んの^何と^いふ^と吾^輩の^所に^電車^道に^出る^可
ま^り可^き句^配の^ある^古い^海藻^があ^らつ^て多^く汚
れ^が江^戸川^に流^出す^るか^れる^障礙^物が^甚
ま^り汚^れを^らる^ると^せき^とめ^るも^えん^が

氣のうつりしめりし時心もどろろ家の前より何人か
又てみよ、まんの等々杖をもち、心も杖や介
すといふの障、欄拍をもち去つて母汚れを決する
のか例とちりてぬる。えんる尖天びし手控ひにことか
るく。いつの中中りしをのびきりさうさう歩さくやうさ
仕末に、所内の衛生を重んずるもの誰か
頼まんとぬのに、まももさぬの届いれよをを
まうらおかしく思ふ。放棄の時ハ死んと毎時
娘が同付する心か、娘が志きりし自合を和すんも
常を聴き入るまんの心、娘がまもも娘まうのれし笑
つてゐる。何人の故は斯く習癖のあるか自合を分
らまんの、停滯も不愉快と感するからをあらう。

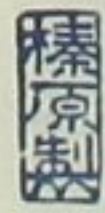
深田

停滯の汚みか決して一時に汚れを清めて時々と
汚れを去る。汚物清を推して流すのを見よ。めり
ま痛快の感さす。糞積停滯の不快何人も感す
る所也。自合の便秘を日まま不快と感する、よん杖の力
を以てす。除き得る。併し、一日の間に汚れを清むることかあ
る。男中、糞積停滯の不快、糞積の糞積のたすま止す
べしや。

○此年、杖に臥すの地万歳、余が幼年時の経歴
を十日可運載し、今地り此方版皆その
出身者の位歴をぬめり、今括り地方別に出版
を以て、今朝朝の廣生ハ左の如し

て、美をえると、何れも誰れもを傳へ、何れも千の某
も傳へ、何れも某の潤を、料曰く不足の後、後傳へ
るも、幕集と、流るに、口の面目、躍如、志かしの、
侯藩の内方、七さうけ、出せ、八十の七八と、年記、年、
五、五、十、出、方、出、す、ら、ん、か、し

日、義、谷、不、没、る、も、節、令、投、郵、の、一、封、封、未、投、見、ま、は、
朱、印、の、長、簡、も、長、為、狂、持、六、十、一、年、行、を、録、す、
如、人、に、運、曆、を、報、す、る、こ、し、六、十、一、年、測、り、事、歴、を、陳、
べ、し、録、す、所、を、し、目、し、七、自、祝、の、一、形、式、と、為、す、べ、
く、亦、此、自、家、宣、侍、の、一、法、と、見、こ、こ、し、を、得、べ、し、其、集、
之、ん、を、傳、へ、を、報、せ、る、也、
○此、元、皇、の、御、物、也、

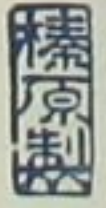


身には、い、佩、か、す、る、も、も、劍、大、刀

盛、き、る、も、も、大、和、魂

と、有、際、い、の、刀、劍、に、御、物、味、が、あ、る、と、い、は、る、也、
御、物、表、の、い、念、書、も、あ、る、と、い、は、る、也、
○余、の、意、に、遊、ぶ、所、は、山、谷、如、此、村、上、所、に、理、髪、を、以、て、
世、事、と、す、る、日、出、谷、集、^{余、未、中}、年、少、も、余、を、教、養、す、
余、村、上、に、到、り、ん、ぬ、も、年、百、一、と、相、友、を、理、せ、し、む、後、の、
年、に、お、お、す、る、也、又、に、柱、け、る、か、如、し、今、も、さ、る、十、数、年、
彼、の、也、亦、老、れ、ん、也、此、年、余、の、所、を、押、置、を、以、
て、す、古、に、縁、を、と、る、念、せ、し、か、い、も、保、と、廿、七、の、
幅、を、あ、る、也、い、の、の、刺、置、を、あ、る、輻、五、款、一、面

と物と書きたるに、理極文を禮讚する語也。圖ら
たりき。理極文の招牌を考へんと、額面の紙
に曰、髮空也。正んる。小物先人と、後紙を、
紙の着放りんことを、恐んて、一紙に云く、不教
白紙、唯人先、更なる春風満面生、書し、畢りて、以
為、今、逐鹿、致、心、付、彼、人、南、北、逐、鹿、の、を
んを念めや、あや。

○杉林飯山年少の頃の行跡、王算の、
○天上秋無色、鳥の海外、
あ、と、
出、未、
研、


疑、
の文行と他の字を、
をを得て、
体の、
か故、
ち此冊、
○坐、
一、
了、

一月の國醇會々報

正月ホふきはしい「昔の正月の御話」が高村光雲翁の口から記憶の糸抜吐かれると一庵は感にとうはれ音ニツしらぬ昔の元旦が眼の前ホひろげられ紙鳶の「うなり」が聞え追羽子の音が聞え出したこそ不思議はあつた。

座談は市島春城翁と新入会の高島平三郎氏伊坂梅雪氏など盛んホ「メートル」をあげ梅雪氏の食通から「鮎の中落を蛤貝で捲いて」醤油で喰べるとこんな旨いものはない。実は昔折助が河岸で只貰つて喰つたもの、通なものです。次の会にも暗汁がよい。

春城翁は酒通「京のスグキの細刻ミト七種唐辛が旨い」「澤庵がなくは江戸ッ子は七びる」の説から光雲翁の澤庵の漬け方「甘いのが糠七升に塩三升次が五升塩七升塩」と話は話を産んで淀みがない一方香取秀真氏は「今夜の酒は水ぽい」とあつて徳利の口ホ半紙を何てがつて、逆さまにすると水はぽたくと滴る「これが水だ」と錦郊幹事を放へた。甚兵衛自慢の茶碗むしに、不忍池畔の貝料理甲子の蛎の釜飯で暖かい食味を満した

紙鳶の話から板谷波山氏が龍の字、魚の字の空おき手ホ入つたものであつた

田中智學翁御見舞の画帖へ各自揮毫十時散會。

出席の諸氏

- | | | |
|-------|--------|--------|
| 高村光雲翁 | 市島春城翁 | 高島平三郎氏 |
| 香取秀真氏 | 高須梅溪氏 | 伊坂梅雪氏 |
| 板谷波山氏 | 渡辺長男氏 | 鹿島龍藏氏 |
| 齊藤富ト氏 | 鷺塚蓮太郎氏 | |

篠田 河野 齊藤 三幹事

六十一年行

誕生明治第三年。
人生五十拂込濟。
此間思廻身邊事。
川柳警句入御感。
丁株國王賜勳章。
悠紀齊田田植唄。
更爲陸軍製軍歌。

今年恰迎還曆年。
餘分儲得十一年。
變動亦有年一年。
天馬下賜其翌年。
爲祭安翁五十年。
謹作大典舉行年。
大觀兵式亦同年。

拜受大典紀念章。
大正十年夏六月。
硯友同人追々亡。
爲紅葉遺子媒妁。
木曜會員大方老。
白人會亦月々催。
臨時國語調査會。
三越時好俱樂部。
爲奉仕會評議員。

大正昭和兩度年。
祝祭御伽三十年。
思案柳浪死隔年。
丁度故人廿七年。
多超人間知命年。
三昔算來創立年。
爲其一員已幾年。
常任幹事及多年。
出席大會每新年。

先年自興吸霞會。
笑話會是趣味會。
馬兮獅子又硯屏。
地方巡講年々忙。
滿州朝鮮又臺灣。
更向布哇巡四島。
去年夏初赴樺太。
年末一寸渡民國。
先年北陸旅中病。

共樂翰墨不問年。
今春恰達滿三年。
採集道樂募逐年。
不在我家殆半年。
何爲再遊隔十年。
恰是大正諒闇年。
領後二十有餘年。
歸自青島直越年。
三週在床稀近年。

兒童文庫起問題。
出金色夜叉真相。
與博文館遂絕緣。
震災之年損住宅。
修繕之間不得止。
一昨年來出全集。
母者老年猶達者。
一兄二姊皆健在。
長男在松竹會社。
兩女已嫁各成母。

丁度圓本流行年。
無間絕版不出年。
一夢如泡卅餘年。
漸成修繕後二年。
假住大磯四半年。
今年正是完成年。
去年已過喜壽年。
不遭凶事十數年。
關係興行已在年。
就中長孫學齡年。

二男末女近卒業。
末男去年入中學。
養老保險掛幾社。
近年揮毫多依賴。
阿爺餘光難有哉。
樂天主義是童心。
此分增々加馬齡。

昭和五庚午年一月

是了四年彼定年。
明治學院第一年。
長首待構滿期年。
恰似阿爺於晚年。
尙照前途幾多年。
還曆年者若返年。
元氣又迎古稀年。

小波 巖谷季雄

近業燕作音供
賀正

時事偶感

大邦妖霧蔽殺氣時休身假頻飛飛撒奸雄
互擁矛不聞民命若將釀土崩夏夏萬千
秋蹟誰茲盡善獻

述懷

八十衰翁獨僅存
故朋凋落遠鄉園
壯年銳氣空愆事
計拙營疏每乏殫

遼北齊南貪客夢朔風邊月役吟魂
杖頭尚挂絡錢在也是還官優恤恩

昭和庚午二月

八十一叟 肥田野錦川林草

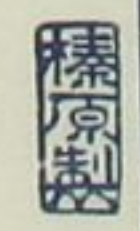
無冬心先生平金匱錢瘦鐵



康島侯爵錫島之賜硯

飯山漸珩賞

○予往年一塔形の物と謂ふことあり、高さ約
 一寸二分許、幅三分強、塔一章、くまも黒、仁清
 心を如念の寺に納めたるものと云ふ、如何なるに
 清風のしるしをもあつた、此物今も存し、小
 品架中一花あり、但比爾後、こんと何れも
 を見たり、ことなき、仁清心か否かを判し得
 ざりしが、今の大阪久寶寺何温古洞(今城某)に
 寄せて集る日、經中一書物の部に、佛堂陶塔、仁清
 一五〇〇とあると見ふ、こんどよか否、實物を之
 みて、概する判す可く、その仁清、陶塔あり
 ことだけ、初る得ず。但比仁清心とて、何れ
 否。高きも、安きも、似たり、或る陶塔、大いなり



くあるの一見、此きことあり也

二月六日

○数年前、余の年壯時代、湖後高のまありし頃、流が北
 端より亡大枝元長辰を追憶した。枝元の自合が高
 田新多の執事としてある際、新多日、新多の記高
 びあつた。田新多が、振らうらうら、の退社して、如
 意く歸るる途次、自合を訪ふ。時、雪後の池分
 雪か積つてあり。是れ迄、流り、文もさう、枝元か
 ら退社の言、流を、受へて見ると、氣の毒な、流か、勤
 き、帰京して、差、南の、投、まき、高、か、ま、譯、さ、高
 田、止、あり、て、自合の、助、筆、を、やつ、て、い、か、と、さ、高、と、枝
 元、い、ま、高、人、が、是、流、さ、う、流、い、れ、い、と、い、ふ、れ、と、こ、い、自合の
 宿、高、と、其、さ、う、た、か、高、の、流、高、田、新、多、も、自合の、い、

一人の記あるを増資する方が無つたに於て枝元を引き
留めようとして社から幾多の金を生かして
ことが困難と思つた取つた自らの脚からの補給を
受けようとして全託自らの家として社といふ金
銀上の関係を断つて助筆せしめしこととして自分
をさ決して秘蔵の身のことにして断つて決
しこの大無謀の身のことにして断つて決
時代よりあり打の義侠行動があつた。枝元の二度
庶民救済出身の鹿兒島縣人の性懐の善良
であつた。晩年の東京に一時参りて此後入社
の政進新史の主要人物として通つた社
説を著書し、又これが該書に載せられたが、高田く

櫻原製

未だころは業ハ熟しとあるころは。時々自分から
を授けて社論を代筆させ、宿々帰つて其の
脚を任かせ、ハツクルの文庫史を原書に著人が
やつたことよめた。三ヶ月間、自分の公定各の復
命を共々して、今ら各々とも年壯の北人の性懐
の要求の起るころ高田の身、自分の許を得て枝
元買ふこともあつた。その故と云ふ関係が生じた
が枝元は遂に東京に帰つて来た。枝元が改
進黨を立ち上げたころ、何故か双方疎遠になり
来りしころ、枝元が不幸として若死を遂げた。今
後二十数年を任つて来た。翌年、初高の基金
募金の爲めに高田は高田と二十の間、誠後に入

つに際高田の事も言つたが自分が高田の事も在り時
 代の知人が多く自分を迎へてあつたところと
 今に赴いたが、ある夕べ酒友太田徳次左エ門が
 多時ニあるのがあつて、あつたは是れ高田の地
 といふ、高田の女性があつたから某所へ来たといふ
 といふ、不審と思ひて、掘きまゝ行つて見
 ると、高田一人の校書があつた。高田が枝元と名を
 受ける高田といふ、高田といふ、高田といふ、
 自分を見たと忽ちワット泣き出したのが、月下氷
 人に合して故人を想ひ起して、此の事あつた。自分
 坐りに懐しの國を打たぬ袖を濡らしたことが
 ある。此の太田七十数年前に折き、すむて一坊

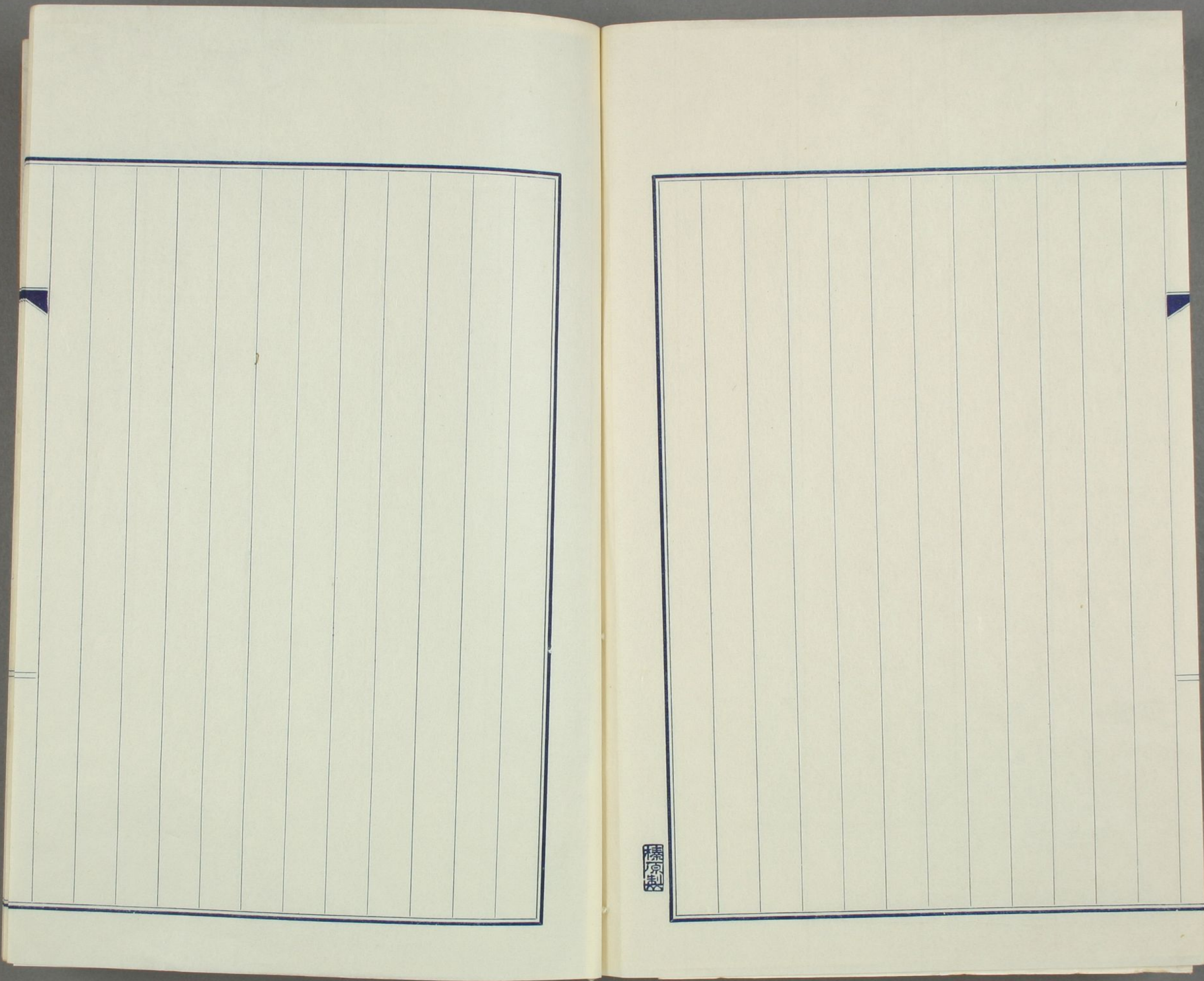


の折りとあつた。



藏氏堂玉合川

圖子獅筆舟雪



紅

以下全て

白紙

